



Ishinomaki

**Choate - Kaisei
Exchange Program
08.17.18 ~ 08.23.18**



Choate Kaisei Exchange Program @Ishinomaki

2018年8月17日 - 23日

Created by Kaisei Academy & Choate Students

開成高等学校

Choate Rosemary Hall

はじめに

久野 凌

私は高校1年の2016年9月から1年間、アメリカのChoate Rosemary Hallへ留学しました。留学先のChoateでは、日本、とりわけそのサブカルチャーに興味を持つ人がとても多い印象を受けました。話を振られると出てくるのはアニメや漫画、ラーメンや寿司などで、それはそれで楽しかったのですが、どこか違和感があったのも確かに覚えています。実際の日本の「影」の部分を知る人は少なかったように思えます。

帰国後の2018年3月、東日本大震災が起きてから7年、3月11日が近づくにつれて連日報道されるその日をテレビで見ている、関東に住んでいる私たちにはずいぶん昔のことに思われるその災害に、東北が本当に復興したのかが気になり、思い立って宮城県石巻市に行ってみました。

現地で津波に押し流された地区を見ると、復興と呼ぶにはまだまだだと感じ、そして記憶の風化が著しいことに懸念を抱きました。さらに、外国人への震災の説明もあまりなく、現地で通訳を求められ、外国語への対応の必要性を感じました。

日本に興味を持つ外国人にサブカルチャーだけではない日本を、被災地の現状を知ってもらいたい。そして私たち日本人高校生は将来を担う者として対峙すべき「影」の存在を認識するべきではないか。被災地に貢献する為に何か出来ることはないかと考え、この「Choate-Kaisei Exchange Program」を企画致しました。その活動をまとめた本冊子をぜひ一人でも多くの方に読んでいただければと願っております。


Foreword

Ryo Kuno

For an year from September 2016, I attended Choate Rosemary Hall as an exchange student. At Choate, I saw a plethora of students interested in Japan, especially in its subculture: anime, manga, sushi, and ramen. Indeed, these topics were on Japanese identity, and were entertaining to talk about, but I did recognize a slight feeling that what I was talking about wasn't really what I wanted to present about Japan. I also felt that few people knew the "dark side," the problems present Japan faces. In March 2018, after coming back to Japan from Choate, I went to Ishinomaki City, Miyagi. Seven years from the disaster, as it got closer to March 11, the news more often showed documentaries on the reconstruction of the devastated areas, which made me curious of whether the restoration of Tohoku was actually complete. When I saw the districts struck by the tsunami, I thought that the restoration wasn't yet complete at all, and I realized the danger of the memories of disaster fading within time. Additionally, explanations for foreign visitors were lacking, and I was asked for some impromptu translation. I felt the serious need of these areas to adapt to foreign languages. Shouldn't we let foreign people interested in Japan know what Japan truly is besides its subculture? Shouldn't they go see and understand the devastated areas and its problems? Shouldn't we, the young Japanese recognize the "darkness" we have to face in the future? Driven by the urge of contribution, I planned out this "Choate-Kaisei Exchange Program" and decided to spread this pamphlet, a one which we put together our ideas and thoughts. Again, I hope this booklet will be read by as many people as possible.

目 次

はじめに	2
Foreword	
旧大川小学校	5
The Tsunami at Ookawa Elementary School	
災害時のピクトグラム	25
Pictograms in Disasters	
ボランティアと日本文化における「甘え」	29
The culture of amae and its presence in disaster relief	
助け合いの精神と物資不足の価格高騰について	34
The Spirit of Mutual Aid and the Lack of Supplies in Damaged Areas	
混乱の中での情報の重要性について	38
The Importance of Information	
平成30年7月豪雨（西日本豪雨）について	42
Torrential Rain in Japan and Correspondence at Evacuation Shelters	
復興とは	47
What is “復興（reconstruction）”？	
未災地への警鐘	55
Warning for Misaichi	



石巻NEWSéeボランティア活動（一部）	59
石巻の活動・ディスカッションを振り返って	68
石巻観光ガイド Ishinomaki Tour Guide	78
おわりに	80
Postscript	

旧大川小学校

久野 凌

大川小の津波事故

2011年3月11日午後2時46分、宮城県沖で起きたマグニチュード（M）9.0の東北地方太平洋沖地震による津波で、宮城県石巻市大川小（児童108名）の児童70人が死亡し、4人が今も行方不明。学校にいた教職員11人のうち、男性教務主任を除く10人も犠牲となった。当時校長は休暇で不在。学校は海拔1.1メートルで北上川河口から約3.7キロ離れて、市の津波ハザードマップで浸水予想区域外だった。地震発生から約50分後に第1波が到達し、最高水位は高さ8.7メートルに達した。学校管理下で戦後最悪の事故とされる。

(2018年3月6日河北新報記事より抜粋)

用語

・正常性バイアス：自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価したりしてしまう人の特性、いわゆる「自分だけは大丈夫」という考え

・ハザードマップ：自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図化したもの

*大川小学校は、津波の予想浸水域から外れており、津波の際の避難所となっていた。

・震度：日本で使用されている独自の震度階級。地震の揺れの大きさを10段階で表す指標である。東北太平洋沖地震、通称東日本大震災では宮城県で最大震度7が観測された。

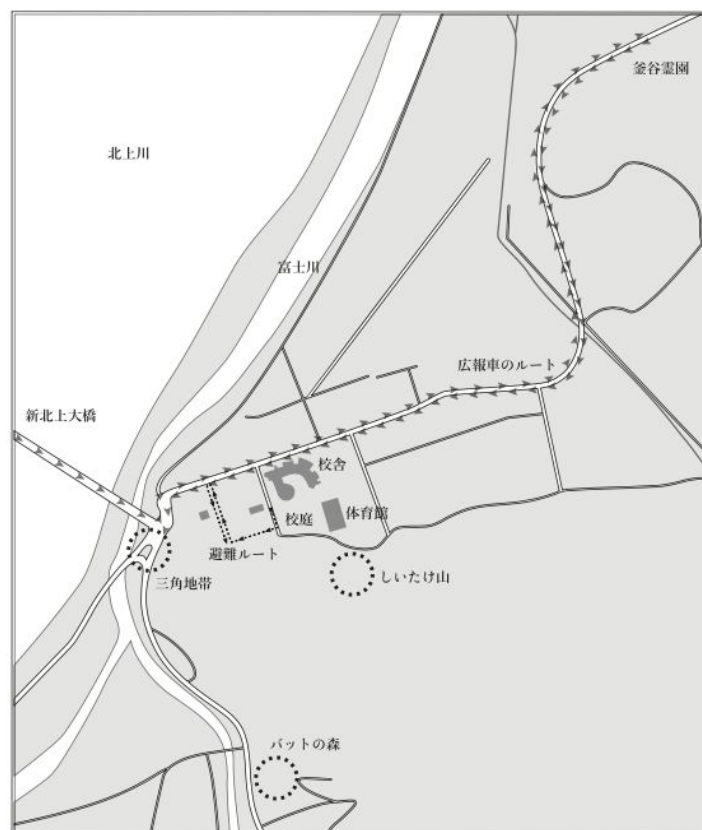
・プロアクティブの原則... 近年日本に紹介された、危機管理に関する重要原則

- ① 疑わしい時は行動せよ
- ② 最悪事態を想定して行動せよ
- ③ 空振りは許されるが見逃しは許されない

この原則に関して取り上げられる問題として、「当然と考えること」と「当然の事とし

大川小学校研究会第二回研究会 資料

2018年5月25日
世話人 金海初芽



て実施出来ること」は大きく異なるということがある。一見当たり前に見えるかもしれないプロアクティブの原則だが、実践には大きな課題がある。

具体的なケースを想定して考えてみる。

ある人が防災主管課の職員だとする。[1]

「梅雨期に入り、何度も大雨洪水警報が発表された。そのたびに関係職員の待機あるいは動員を行った。しかし、管内には豪雨も被害も発生しなかった。職員の中には、頻繁な待機・動員にウンザリといった顔の者も出てきた。また、財政部局からは、勤務時間外に行った職員動員に伴い残業代が少なからぬ額であるとの報告があった。

このような経過の後に、ウィークデーのある日の退庁時刻直前に梅雨入り後5回目の大雨洪水警報が発表された。しかし、雨はまだ降っていない。」

上記のようなケースに遭遇したとき、人はプロアクティブの原則を貫徹できるのか？ 3つの原則に沿って考察をしてみる。

①「疑わしいときは行動せよ」原則に照らして

重大な災害の起こるおそれがある(=疑わしい)から大雨洪水警報が出たわけだから、それに備えて行動する必要がある。しかし、退庁間際の警報であること、既に過去4回の大雨洪水警報では大事に至っていないこと、「またか」と言いたげな関係職員のウンザリ顔、空振りに終わった場合の財政部局からの嫌みやプレッシャー等々がある。そのような思いを振り切って関係職員を所定の配備につかせることが、この職員にはできるのか？

②「最悪事態を想定して行動せよ」原則に照らして

大雨洪水警報は発表されたが、「雨はまだ降っていない」状況で最悪事態を想定して行動することは果たして可能なのか？文字どおりに「最悪の事態を想定」すれば、職員を退庁させずに「全職員配備」体制へ移行することになると想定されるが、さすがにそれは杓子定規の解釈と思われる。

実際的には、防災主管課職員は、「全職員配備」もありうることを想定し、「ア.そのような事態に至るまでの過程においてとるべき自分自身や防災主管課及び災害対策本部事務局の対応を確認しておく」、「イ.全職員に対し庁内放送などにより意識や構えを徹底(状況の急変に備え気象情報や降雨状況に常に注意すること、異変を感じたら指示を待つことなく早めに参集すること等)する」ことなどの手を打つべきであろう。

さて、その後、降雨が開始し途中で豪雨へ変わるとする。災害はまだ発生していない。この時点でこの職員はどう考えるだろうか？

「豪雨に変わったが、すぐに止むかも知れないのでもう少し様子を見よう」との考えに傾くことはないだろうか？气象台から大雨洪水警報解除の発表があればこのような対応で良いと思われるが、そうでない限り、豪雨開始とともに「最悪事態」シナリオへ至る確率は高まったと考えるべきである。

この時点での「最悪事態を想定した行動」としては、「ウ.配備職員の増強」、「エ.その他の職員に対して事態の急変への備えの徹底」、「オ.住民への迅速な広報体制の確認・確立(ローカルマスコミなどの連携の確認)」などが例として考えられる。以上に例示したア～オの対応をこの職員は当たり前のこととして実行できるだろうか？

③「空振りは許されるが見逃しは許されない」原則に照らして

①及び②の原則に沿って対応すれば、空振りはあっても見逃しは防げられると思われる。しかし、空振りが続いたらどうであろうか？ おそらく、次の機会にはこの職員は「また空振りだったらどうしよう」と考えると思われる。一度や二度の空振りであればそのような思いを打ち消すことができたとしても、「空振り」が度重なると人の心中はおだやかにはならないだろう。いつしか、「空振り」の経験(あるいは恐怖)が、職員が①や②の原則に沿って対応することを躊躇させ、本来必要な対応体制の規模を縮小させるといった選択をさせることになる。災害は意地悪であり、そのような脆弱な体制のときに限って襲ってくるのだ。

この原則は、そのような状況に陥りがちな防災関係者を支え励ますものとして重要である。行政組織内部の論理としては、「空振り」は経費や時間の無駄のようにとらえられがちだが、この「空振り」があるからこそ「見逃し」がないことになる。この「空振り」は「住民の生命・財産を守る」ための保険なのである。

★ディスカッションの内容、考察

大川小学校の人的被害は経験と想像力の不足が主な要因であると結論づけられるのか？

想像力の不足という観点から見たときに誰がああ津波を想定できたというのだろうか。実際に津波の動画を何本か観た時も想像をはるかに超えるものばかりで「想定外」だったという解釈も一理あるという声も挙がった。また、北上川遡上津波に関する知識がなかったということもあり、裏山より内陸にある三角地帯に避難したということは結果から見れば確かに間違っていたが、緊迫した状況下の中でそう判断したのは無理もないのかもしれない。それより問題なのはなぜ小学校の校庭に50分も留まっていたかということにあると結論づけられた。

・なぜ人々は校庭に留まっていたのか？

まず原因としてあげられるものに正常性バイアスがあると合意した。自分は今まで普段通り生活して来た、もしくはなんとかなって来たから今度も大丈夫だろうという油断が彼らを襲ったのだろう。あるいは本当はどこかでまずいと思いながらも周りの雰囲気流されてしまったなどということもあるかもしれない。

Choate生、開成生共にこのような状況下で自分は正しいと思って周りに反対されながらも行動をできるかということ問うた時、何人かが手を挙げた。

自分は意見に自信を持てるから大丈夫という意見もあったが、本当にそうだろうか？実際に想像を試みた時に私自身は流されてしまうだろうと思った。日本の学校、特に小学校に顕著に見られることだが、先生の言うことは絶対で自分の意見は尊重されない。個よりも団体という形の主義が生徒の「山に逃げないといけない」という意見をシャットアウトし、右往左往するという結果になってしまったのだろう。また、校長が当時不在だったということも被害を助長している。船頭多くして船山に登るということわざがあるが、教頭や教育委員長などの教諭と他の教諭の判断の違いによって意見が割れ、校庭に留まってしまったのだ。生徒には団体主義を求めるのに対し、教諭は個を過剰に強調する。この問題の根本的解決は教育制度の改革という大規模なものである。

では小規模、短期間で実践可能なものはないのかということでプロアクティブの原則について議論が移った。果たしてプロアクティブの原則は有効なのか。主に焦点が当てられたのは②の最悪事態を想定して行動せよ、ということだった。まず、「最悪事態」とはどのくらいのことなのか上記の職員のケースを鑑みると分かるが文字通りの解釈ではないという問題がある。「しゃくし定規」の解釈すぎるなど

という批判があるようでは明確な原則であるとは言い難い。緊急時ほど判断が鈍るということを考慮すると、もっと明確に判断基準を設ける必要があるという結論に至った。

結果として、私達は災害に遭った時、どう対応すれば良いのか。それはまず災害発生前に遡る。確固たる知識をつけること、被災者の経験を聞くことは災害発生時に「最悪の事態」をより正確に想定するということを助ける。災害が発生。これらの経験と知識は人を混乱状況下での確に動かすことができる。「想定外の事態」というリスクも存在するが、これはプロアクティブの原則の①にある「疑わしきは行動せよ」ということを実践するに尽きる。少しでも嫌な予感がすれば動く。Better safe than sorryということわざが英語にもあるが、これに同意する形で一致した。

●あなたならどうしますか？

2018年5月25日に大川小学校研究会第二回研究会が東京の専修大学で行われました。その際に、この裁判の担当弁護士の先生がおっしゃられていた言葉がとても悲しく印象的でした。大川小学校の児童だったお孫さんを亡くされたご遺族の祖母の方が「先生がいなかったら孫は死ななかつた。」と。

石巻市地域防災計画の記載によると、「平成23年3月11日に発生した東日本大震災を始め、過去に三陸地震津波（明治29年、昭和8年）や昭和35年発生のチリ地震津波など幾度も津波による被害を経験し、東日本大震災においては、市内で四千人弱の死者・行方不明者が発生している。人的被害は、地震動による被害と津波による被害の区別が難しいものの、検視による死因の大半（約9割）は、水死となっており、震災による人的被害のほとんどが津波による被害と言える。」[2]とあります。この祖母の方が過去の津波の経験から孫である児童に、「地震がおきた時には津波がくる可能性があるから、すぐに山に逃げなさい。」と言いつけていたかもしれません。あくまでも推測の域を出ませんが、この祖母の方の言葉の裏にはそういった思いが隠されているように見えてなりません。

もし、あなたならどうしますか？あなたが児童だったらどうしますか？

以前から親や祖父母に言われていたことを思い出して、山に逃げた方がいいのではないかと考えている。でも先生が全員でここにいるように言っている。その言葉を振り切ることができますか？

どうすれば二度と同じことを繰り返さないことができますか？

あなたが教師だったらどうしますか？

The Tsunami at Ookawa Elementary School

Ryo Kuno

Ookawa Elementary School, a public elementary school, was open until March 11, 2011, 2:46pm. The school was located about 3.7km away from the mouth of the Kitakami River and 1.1m above sea level, outside of the city's Tsunami Hazard Map Area. Fifty minutes after the earthquake, the first wave hit the school. The wave's maximum height was 8.7 meters, which was much higher than expected. 70 out of 108 of the students and 10 out of 11 of the faculty and staff lost their lives to the tsunami. Four students are currently missing. Five escaped the tragedy: one male faculty and four students were miraculously alive. The principal, who was on vacation, was not present. This tragedy was the worst disaster to ever befall a Japanese school since WWII.

(Excerpt from March 6th, 2018 Kawakita Shinpo Newspaper)

Explanation of terms:

-Normalcy bias

The normalcy bias is a belief people hold when facing a disaster. It causes people to underestimate both the likelihood of a disaster and its possible effects because people believe that things will always function the way things normally have functioned. This may result in situations where people fail to adequately prepare themselves for disasters, and on a larger scale governments fail to include the populace in its disaster preparations. About 70% of people reportedly display normalcy bias in disasters.

-Hazard map

A hazard map is a map that highlights areas that are predicted to be affected by natural disasters.

-Proactivity/Proactive behavior

The rules of proactivity

1. When in doubt, take action
2. Always assume the worst case scenario
3. A wild swing is forgiven while a called strike out is not (metaphor)

-Seven Scale Seismic Intensity

The Japan Meteorological Agency Seismic Intensity Scale is a seismic scale used in Japan to measure the intensity of earthquakes. It is measured in units of **shindo** (震度, seismic intensity, "degree of shaking"). Unlike magnitude measures such as the moment magnitude scale (Mw), and the earlier Richter magnitude scale, which describe the energy released by the earthquake, the JMA scale describes the degree of shaking at various points on the

Earth's surface, and is analogous to the Mercalli intensity scale. The intensity of an earthquake is not totally determined by its magnitude, but varies with the depth of and distance from the event; for example, a quake may be described as "shindo 4 in Tokyo, shindo 3 in Yokohama, shindo 2 in Shizuoka".

Observations

Being responsible for one's own life

A grandmother who lost her grandson in Ookawa Elementary School mentioned that if the teachers weren't there, her son would've survived.

Of course, there is no doubt that the faculty must judge the situation correctly, but it is necessary that students think on their own and protect their own lives . However, since Japanese education focuses on respecting and listening to the elder, so it is very hard to ask for students to disobey the teacher and make decisions on their own.

About the rules of proactivity:

It is necessary for the community to tolerate "wild swings." In some cases, citizens criticize their local governments of announcing overly assumed warnings, but in order to let the rules of proactivity work at its full extent, these must be forgiven.

Present day Japan tends to frame everything in questions of responsibilities, neglecting the actual resolution of the problem. Some claim that the faculty should have tolerated some chaos in order to rush the students to safety. This point well proves that the faculty should have thought of the students' safety as a top priority, forcing them to evacuation.

Case Study for the Rules of Proactivity [1]

Suppose you are a director of disaster management at some national department.

It is rain season, and a plethora of warnings of heavy flood and rain were announced. Every single time a warning was announced, you order the department to get ready to take action. However, nothing severe happened. Some staff of the department has the expression of exhaustion and seem fed up. The financial department of the organization you belong to often claims you that your department wastes not a small portion of money every time a warning is announced.

In this situation, another warning was announced at Friday night right before everyone leaves the office. You look outside, and the rain hasn't even started yet. Can you take action according to the rules of proactivity in this case?

Here are observations made from the three points of the rules of proactivity.

1. When in doubt, take action

You have to take action because a warning has been announced. However, the past couple of times the warning was a false alarm and the staff are stressed out of it. The pressures from the financial department is also intense.

Can you, again, take action neglecting these factors?

2. Always assume the worst case scenario

The warning was announced, but can you assume the worst case scenario when the rain hasn't yet fell? If you literally assume the "worst case scenario," you might prevent every single staff from going home and might order every single person to work, but isn't that too literal of an understanding?

Thinking realistically, you probably should assume the very worst "could" happen, and: a. check how you give out orders to every staff of the department, b. send a quick all-department email saying that everyone should be aware of the alarm.

After you shoot the email, rain starts to fall heavily. "Disasters" haven't happened yet. What would you think? You might've thought like:

"It's a bit heavy of a rain, but it might turn out to be okay. Let's just observe it for a while." If the meteorological agency announces that it will turn out fine, you might be able to rest, and simply observe the rain. In this case though, you should think that this situation is one step closer to critical disaster.

At this point, action towards the worse case scenario could be: c. Gather more staff, and let them be ready to take action, d. Re-notify all staff to be ready to take action in case of the worst case scenario, e. Cooperate with the media and check that the flow of information is smooth. Can you, as the staff, could follow this whole mindset every time there is a possibility that a disaster could hit?

3. A wild swing is forgiven while a called strike out is not (metaphor)

Based on rules number one and two, it might sound as if wild swings are forgiven while called strike outs are not. However, what happens if wild swings continue? Possibly, you would concern the pressure around you. The atmosphere of the people around you become hostile as your orders given are meaningless in cases of mispredictions. The fear of having another wild swing makes you hesitate, telling you not to take action when you really should. Disasters are unnecessarily mean in that sense. They strike only when your guard is down. Rule number three is not only a rule for countering disasters, but rather one for encouraging and motivating the people who work for disaster management. In a political or national organization, these logics are considered a waste of time and money, but those "wastes" are what makes us prepared for disasters, the insurance for protecting the citizens' lives and their fortunes.

Analysis and Ideas from the Discussion

Q. Can it be concluded that the damage in Ookawa Elementary School mainly comes from the lack of experience and imagination?

A. How can people possibly imagine the severe disaster that struck Ookawa? We saw multiple videos of tsunami hitting Japan on YouTube, and some agreed that the government saying that the disaster was "worse than expected," or that the damage was "far greater than we thought" cannot be blamed much even though they should've prepared more. Adding on to that, in Ookawa, there was more than one type of tsunami that struck the school: the tsunami that came from the sea coast, and the tsunami that came from the river. The fact that no one knew that the tsunami was coming from the river also enhances the point that the whole school body started evacuating towards the delta area to some extent. Under the chaotic and extreme circumstances, it is not necessarily odd to make the decision to go inlands to the delta area instead of heading up to the mountains closer to the sea coast. Rather the problem lies in the fact that the students did not start evacuating until one minute before the tsunami struck though they had more than an hour to do so.

Q. Why were the people remaining at the school field for over fifty minutes?

A. First we all agreed that one of the reasons to the question is the normalcy bias. Perhaps because they have been well for the past years, and they thought that they will be as well as usual, they have been careless. Or maybe somewhere deep in their mind, the evacuees at the school field had the thought that it really was a dangerous situation, but they didn't act because the atmosphere made them less inclined to decide on any actions.

Q. How many of you think that you could take action and evacuate based on the decisions you made even if that neglects the atmosphere nor the majority of the people's opinions?

A. A few students raised their hand. One claimed that he is usually confident of his own opinions, and said that he will be able to handle the uneasiness inside him to push through his decisions. Another claimed that he might waver his decision. Collectivism is a phenomenon oftentimes seen in the Japanese education system, especially in elementary school. What the teacher says to a students is not an advice, but rather an order. Students learn to respect the rules and the group in elementary school, making them hard to act on their own decisions. This may as well affected Ookawa in a way that individual opinions on evacuating towards the backyard hill was shut out, making the whole evacuee group stagnant in the field for over fifty minutes. Additionally, the lack of a clear director was critical. On 3.11, the principle of Ookawa was not at the school due to his day off. Therefore other faculty fought over the leadership of the school, making the evacuation slower than ever. Asking students to behave well as a group while being overly selfish in front of them is a contradiction most Japanese public educational institutions hold. The fundamental solution for this is a long term renovation in the educational system.

The discussion moved towards finding a short term solution of countering disasters. The rules of proactivity and its effectiveness was discussed. The main focus was rule number two: Always assume the worst case scenario. It was pointed out to be problematic that the "worst case scenario" isn't always literally the "worst case scenario," as been seen in the example above. Not being a rule with clear definitions and regulations mean that people might not be able to rely on them in

desperate times. Therefore, it was concluded that the rules of proactivity need to be more clearly defined in order to work flawlessly and smoothly.

As a conclusion, what shall we do when we encounter such disasters? First, there are steps to be taken before the disaster occurs. Gaining as much accurate knowledge as possible, and imagining the experiences by listening to people from the devastated area is critical since the knowledge obtained becomes an ensured reason to take action. Next, after the disaster strikes, in cases of unexpected events, the rules of proactivity come in role. Rule number one: When in doubt, take action. This leads us to evacuate to a safer place more often. We agreed to the saying, "Better safe than sorry" in the end of the discussion.

Translation by Ryo Kuno, Kaki Su

Edited by Robert May, William May, and Ziyen Lei

What would you do?

On May 25th 2018, the second meeting for the Ookawa Elementary School Study Group was held in Sennshu University, Tokyo. A grandmother who lost her grandson in 2011 spoke and said: "If it wasn't for his teachers, my grandson would've not been dead that day." Silent sorrow filled in the room.

According to the Ishinomaki City Anti-Disaster Program Guideline, the Ishinomaki region has experienced tsunamis in 1896, 1933, and 1960. They had casualties in all three cases due to the tsunami resulting from earthquakes.

It could be assumed from this guideline that this grandmother was telling her grandson, a student of the Ookawa Elementary School, to "run away to the mountains whenever an earthquake happens, since a tsunami might strike." Would you be able to evacuate safely, making your own decisions for your own life?

If you were the student, and if all the teachers are telling you to stay in the playground or school building, could you neglect these words and run for your own life?

What would you do if you were the teacher? Can you embrace the pressure of being responsible of the children's lives and make the right decision? How can we never repeat such casualties?

2018年5月25日

世話人 金海初芽

大川小学校で起きた津波被害の経緯

- 2011年 3月 9日 11:35 三陸沖を震源とする地震発生、石巻市では震度4を記録。
- 11:48 青森県太平洋沿岸、岩手県、宮城県、福島県に津波注意報発表。
- 14:50 津波注意報解除。
- 児童は校庭に避難、定時に通常通り下校（津波注意報解除は確認せず）。
- 職員室で裏山に階段を設置する会話。
- 10日 校長が11日の年休を申請、災害発生時の引き継ぎなし。
- 11日 14:46 地震発生、石巻市では震度6強を記録。児童は教室内で机の下に避難。
- 14:49 宮城県に6mの津波警報発令。
- 停電で放送設備が使用できず、教職員の口頭での指導のもと校庭に避難。
- 14:52 校庭傍の防災行政無線「（サイレン）只今、宮城県沿岸に大津波警報が発令されました。海岸付近や河川の堤防などに絶対近づかないでください」
- 15時前 保護者への児童の引き渡し開始、15:30までに27名の児童が下校。
- 14:58発のスクールバス運転手「学校側の判断がはっきりしない」と無線。
- 15時頃 近隣住民数名～数十名が校庭に避難。余震による落下物等あり、体育館への避難は危険と判断、体育館に入ろうとする地区住民を教職員が制止するなど。児童を迎えに来た保護者が裏山への避難を促す。教職員「お母さん、落ち着いて」「周りの子が動揺するので、先に連れて帰ってください」。

児童を引き渡された後もしばらく校庭に残った保護者や、学校に来たものの子どもの引渡しを受けず学校を離れた保護者も（「落ち着くまでここにいた方がいい」「学校の方が安全なので帰らないように」などの教職員の発言があったという保護者の証言あり）。

15時過ぎ 教員は校庭に来た地域住民も交え、今後の相談。

釜谷地区の区長「ここまで来ないから大丈夫」「学校にいた方が安全だ」。

防寒具や靴、保護者と下校する児童の荷物を渡したり、トイレにいく児童に付き添ったり、焚き火を用意する教職員も。

15:14 宮城県への津波警報を10m以上に更新。

15:23 市職員が学校を訪問、避難者の受け入れが可能かどうかを確認。

15:25 高さ18～20mの松林を超える津波を広報車の市職員が目撃。

広報車放送「松原を津波が抜けてきました」。教職員が校舎2階へ避難できないか確認。

15:32 AMラジオが津波警報更新を放送。

15:36 三角地帯への避難開始。

15:37 10mの津波が大川小学校に到達。

2011年 3月 13日 大川小学校周辺で遺体が発見され始める。

15日 教務主任がメールで大川小の状況を校長に報告。校長はメールを削除。

16日 校長が市教委に「校庭避難、引き渡し中に津波」「油断」と状況報告。

17日 校長が震災後初めて現場に。

25日 教務主任と校長が市教委へ報告。メモ・録音・詳細な記録なし。

29日 遺族への説明なく生存児童の登校式を実施。

4月 9日 第1回説明会。非公開。教務主任が公に姿を見せた最後の機会に。

5月 生存児童、校務員、市職員に聞き取り。

- 6月 3日 教務主任が学校にFAXで手紙を送信（この時点で公開せず）。
- 6月 4日 第2回説明会。非公開。亀山市長出席。
- 8月 21日 報道により5月の聞き取りメモ廃棄が発覚。
- 10月 児童を迎えに行った保護者への聞き取り調査。
- 2012年 1月 22日 第3回説明会。6月の教務主任のFAXが公開に。
- 3月 18日 第4回説明会。1分も避難できていなかったことを教委が認める。
- 6月 初旬 第三者検証委員会の設置が報道される。
- 中旬 3月16日の校長の報告書の存在が発覚。
- 7月 8日 第5回説明会。
- 8月 17日 文科大臣現場視察。
- 8月 21日 市教委が初の現地調査。
- 2013年 2月 7日 第三者検証委員会第1回会合。
- 遺族「なぜ避難の意思決定が遅れたか？」「なぜ誤った避難経路を選択したか？」
- 室崎益輝委員長「要因のすべてを明らかに」「科学的・客観的に」「なぜを繰り返す」
- 3月 23日 第10回説明会。
- 2014年 2月 23日 第三者検証委員会最終報告書「意志決定が遅れたため」「あのような避難ルートをとったため」「24の提言」公開。
- 3月 10日 被害児童23人の19家族が宮城県と石巻市に対し、総額23億円の損害賠償を求める民事訴訟を仙台地方裁判所に提訴。
- 5月 19日 第1回口頭弁論。
- 2016年 10月 26日 一審判決。現場の教員の過失を認定。

-
- | | | | |
|-------|-----|-----|---------------------------------------|
| | 11月 | 9日 | 原告・被告双方が控訴。 |
| 2017年 | 3月 | 29日 | 控訴審第1回口頭弁論。第2～5回の口頭弁論の日程を一括決定。 |
| 2018年 | 4月 | 26日 | 控訴審判決。石巻市教育委員会・校長・教頭・教務主任の事前防災の不備を認定。 |
| | 5月 | 10日 | 石巻市・宮城県が上告。原告は上告せず。 |

出典：大川小学校児童津波被害国賠訴訟を支援する会ウェブサイト
2011年3月11日の大川小学校twitter
河北新報

The Sequence of the Tsunami Events at Ookawa Elementary School

2011		
Mar 9	11:35	A scale 4 level quake occurs near Ishinomaki.
	11:48	Government announces a tsunami warning to Aomori, Miyagi, and Fukushima Pref.
	14:50	Gov. cancels the tsunami warning.
		Students evacuate to the school field and go back home as they do regularly. Faculty did not confirm the cancellation of the warning before releasing the students to go home.
		A conversation in constructing stairs in the backyard hill of the school occurs in the teachers' office.
10		Principal requests a paid day off for the 11th. Request is approved. He fails to inform the teachers about the procedures in case of natural disasters.
11	14:46	Earthquake occurs, marking level 6 at Ishinomaki on the seismic intensity scale. Students take shelter under their desks in their classrooms.
	14:49	A 6m tsunami alert is announced to Miyagi Pref.
		The school broadcasting system is shut down. Students evacuate to school field by verbal instructions of the teachers.
	14:52	Anti-disaster wireless governmental broadcast: "(siren rings) This is a tsunami warning announced to the seacoast of Miyagi Prefecture. Please evacuate from sea coasts and river banks."
	Before 15:00	School starts handing over students to guardians. 27 have gone home by 15:30. A school bus driver says on wireless radio: "The school's judgement is unclear" at 14:58.
	Around 15:00	A couple dozen people around the school start evacuating to the school field. The aftershock causes objects to fall, making the school halls unsafe. Faculty stops district residents from entering. A guardian who came to pick up urges the faculty to evacuate the people to the backyard hill. Faculty's response: "Calm down," "Please go home because the children around will grow anxious." Some guardians remained after meeting with their children at the school; others couldn't meet their children in time and left them. Some even stated that the faculty said that the school is safe enough, or that the people should stay at the school.
	Past 15:00	Faculty joins the neighbors and discusses of future action. Borough president of the Kamatani District: "Everything's going to be alright because the tsunami won't come here." "It is safer at school." Some faculty prepared to start a bonfire while others accompanied students to the restroom.
	15:14	Miyagi Pref. updated the expected tsunami height to over 10m.
	15:23	City officials started to visit schools, asking if the schools are capable of evacuating residents.

	15:25	City official sees tsunami being over the 18-20m pine forest. Public information car broadcasting: "the tsunami has arrived through the pine forest" →Faculty checks the second floor of the building to see if people can evacuate there.
	15:32	AM Radio updates the tsunami warning
	15:36	Students start evacuating towards the delta of the river
	15:37	A 10m tsunami hits Ookawa Elementary School.
13		Corpses begin to be found around Ookawa Elementary School
15		Head faculty emails the principal about the situation at the school. The principal deletes the email
16		The principal reports to the city education board "the tsunami hit during the evacuation process"
17		Principal visits the school for the first time after the earthquake
25		Head faculty and principal reports to city education board. No records taken.
29		The school conducts "attendance ceremony" for survived children
Apr 9		First information session. Not open to public. The last time head faculty makes public appearance
May		Interviews/investigation on surviving students, faculties, and staffs
Jun 3		Head faculty sends a letter to the school via FAX
4		Second information session. Not open to public. City mayor attends.
Aug 21		Media discovers that the notes from the May investigations have been abandoned
Oct		Interviews/investigations for parents begin
2012		
Jan 22		Third information session. Head faculty's FAX to the school from June 2011 is disclosed.
Mar 18		Fourth information session. The education board admits that they couldn't even evacuate for a minute.
Jun	First half	A third person investigation committee is established
	mid	The existence of the principals report on 2011/3/16 is discovered
Jul 8		Fifth information session
Aug 17		The minister of education conducts field inspection
21		City board of education conducts first field investigation.

2013		
Feb		First meeting of third-party investigation committee Bereaved family: "why did it take so much time to make the decision to evacuate?" "Why did they choose the wrong evacuation path?" Masateru Murosaki Committee Head "we should clarify all the factors that contributed to the loss" "scientifically, objectively" "continue asking why"
Mar 23		Tenth information session
2014		
Feb 23		Final report by the third party investigation committee is disclosed: "because of the delayed decision making" "Because of taking such (wrong) evacuation routes" and it also included "24 suggestions"
Mar 10		19 families of 23 victims sue Miyagi Prefecture and Ishinomaki City for compensation of 2.3 billion Japanese Yen
May 19		First oral proceedings
2016		
Oct 26		First verdict. Confirms fault of staff at school
Nov 9		Both sides appeal to higher court
2017		
Mar 29		First oral pleadings after the appeal
2018		
Apr 26		Appeal trial verdict: confirms lack of preparedness for disaster on the part of the school, principal, head faculty, and the city education board
May 10		Ishinomaki City and Miyagi Prefecture appeals to higher court. Plaintiff does not appeal.

At the school close to the river 川のそばの学校で

復興支援ボランティア・大川小学校研究会世話人
金海 初芽

子どもの権利に関心のある人に、知っておいてほしいことがあります。
それは途上国ではなく、日本で起こったことです。

小さな田舎町の、綺麗な学校での出来事でした。
あの災害がくるまで、すべての住民に愛され、子どもたちの平和な学校生活の場だったところです。
一帯を大地震が襲ったあの日、全生徒と教職員は校庭に避難しました。
数組の家族が子どもを門まで迎えに来ました。もちろん、彼らも教職員も津波警報が出されていることを知っていました。この時点で家族とともに下校した子どもたちは助かっています。

他の家族は全員、教職員たちが子どもたちを連れて山に避難したものと信じていました。
そう、この学校の体育館の隣には小さな山がありました。子どもたちはここで、毎年3月にシイタケ栽培の授業を受けていました。道は緩やかに歩きやすく、幼児やお年寄りにでも簡単に歩けるものでした。この学校を知る人は皆、地震があれば子どもも教師もこの山に登るものと思っていました。事実、津波がくる前にこの山に登った住民や子どもたちは助かっています。近隣の他校でも、高台に避難して事なきを得ています。

ところが、この学校のほとんどの教職員と生徒は、それをしませんでした。
もちろん何人かの生徒は山への避難を提案しましたが、教師がそれを受け入れなかったために、誰もどこへも逃げられませんでした。
50分間、校庭で無為に費やされました。
そして、大津波がやって来ました。

最後の1分間に彼らが避難できたのはたった150メートル。
70人の子どもたちと、10人の教職員、スクールバスの運転士が亡くなりました。4人の子どもたちはまだ見つかっていません。
津波がきたとき校庭にいた人のうち、助かったのはたった4人の子どもたちと、ひとりの教職員。
こんなことが起こったのは、この学校ただ1校です。
彼らは津波警報を知っていたし、山に避難することもできたのに、それができなかったのは、彼らの誰にも決断能力がなく、危機管理能力もなく、有効なマニュアルもトレーニングも不足していたからです。
子どもたちの命をまもるという使命は、なおざりにされていました。

これは子どもの権利にかかわる問題です。
児童の権利に関する条約の第3条にはこう謳われています。

1 児童に関するすべての措置をとるに当たっては、公的若しくは私的な社会福祉施設、裁判所、行政当局又は立法機関のいずれによって行われるものであっても、児童の最善の利益が主として考慮されるものとする。

2 締約国は、児童の父母、法定保護者又は児童について法的に責任を有する他の者の権利及び義務を考慮に入れて、児童の福祉に必要な保護及び養護を確保することを約束し、このため、すべての適当な立法上及び行政上の措置をとる。

でも、この学校はこれらの義務を果たすことができず、今のところ誰もそうしていません。

二度とこんなことを繰り返さないために、原因は明らかにされなくてはなりません。

真実をうやむやにしてしまったら、毎年無数の災害に見舞われるこの国で、いつかまた同じことが起こります。

官僚主義、事なかれ主義、楽観的なリスク管理や学校における隠蔽主義は克服されなくてはなりません。

これらは子どもの権利の敵なのです。

数組の遺族は教育委員会と地方自治体を相手取って訴訟を起こしました。彼らは最後まで、訴訟が正しい方法かどうか迷い続けていました。でも、彼らに他に方法はなかったのです。

子どもの権利に関心を持つすべての人々が、この訴訟に注目することを願います。

At the school close to the river 川のそばの学校で

Ookawa Elementary School Study Group Agent/Restoration Support Volunteer
Hatsume Kanaumi

I'd like to share this tragic case with you if you are concerned about children's rights.
It happened in Japan, not a developing country, recently.

It was a really cute and beautiful school in a small town in the countryside.
All residents loved this school, students had enjoyed their peaceful school life until the disaster happened.
On the day the enormous earthquake happened in that area, all students and teachers congregated to the schoolyard right after .
Some families of students came to receive their kids at the gate. You should know that at that time, the teachers and families already knew about the tsunami alert. Kids who went back home with their families at this stage survived this disaster.

All other families believed that teachers guarded their kids by correct evacuation to the nearby mountain.
So, this school has a small mountain next the gym. The kids had a mushroom cultivation workshop on this mountain every March. The path of the mountain is an easy walk for everybody, include young kids and elderly people. All the people who knew this school had thought that students and teachers would go up this mountain if an earthquake happened.
In fact, residents and kids who evacuated to this mountain before the tsunami hit survived. Adjacent schools had evacuated to high places as well and guarded their kids.

But most teachers and students of this school never did that.
Of course, some students suggested evacuating to the mountain but the teachers didn't approve of this, so none of the students could evacuate .
50 minutes was wasted at this schoolyard.
And, the monstrous tsunami came there.

They only managed to evacuate 150m in the final minute.
70 kids, 10 teachers, and a school bus driver passed away. Four kids have not been found yet.
Only four kids and one teacher out of the people who were at the schoolyard when the tsunami hit survived.
Such a case has never occurred in any other Japanese school .
They knew about the tsunami alert and they could have evacuated to the mountain, but they never did that because they couldn't make a decision by themselves and didn't have any risk management skills or a valid manual and training.
The mission for saving lives of children had been left behind in.

This accident is a children's rights issue.
Article 3 of the Convention on the Rights of the Child says:

1. In all actions concerning children, whether undertaken by public or private social welfare institutions, courts of law, administrative authorities or legislative bodies, the best interests of the child shall be a primary consideration.
2. States Parties undertake to ensure the child such protection and care as is necessary for his or her well-being, taking into account the rights and duties of his or her parents, legal guardians, or other individuals legally responsible for him or her, and, to this end, shall take all appropriate legislative and administrative measures.

However, this school couldn't fulfill these obligations, and so far nobody has done so in this case. I think we should clear up the reason in order to never repeat this sort of thing. We should not cloud the facts, otherwise similar accidents will happen again someday in this country which has tons of disasters every year. We have to overcome bureaucracy, immobilism, optimistic risk management and concealment in the school. They are just enemies of children's rights.

Some of the bereaved families have sued the Board of Education and local government because nobody ever acknowledged their responsibility. Until the very end, the families wondered whether or not a lawsuit was the right way for them. But they had only that way.

I believe all people who are concerned about children's rights should pay attention to this lawsuit.

References 引用・文献

金海初芽様（復興支援ボランティア・大川小学校研究会世話人）

Ms. Hatsume Kanaumi (Ookawa Elementary School Study Group Agent/Restoration Support Volunteer)

Wikipedia : 正常性バイアス・ハザードマップ・震度

[1] http://www.isad.or.jp/cgi-bin/hp/index.cgi?ac1=IB17&ac2=99winter&ac3=6309&Page=hpd_view より引用

[2] www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10106000/tiikibousaikeikaku/tunamisaigaitaisakuhen/sousoku/3-dai3setu.pdfより引用

災害時のピクトグラム

古野純一郎

ピクトグラムとは、日本語で一般に「絵文字」「図記号」などと呼ばれるグラフィック・シンボルの典型であり、意味するものの形状や特徴を用いて、その意味や概念を理解させるのを目的とした記号である。視覚的な図として表現するため、年齢や国籍を問わずだれにでも理解することができるという利点がある。言語を介さずに情報を伝達することができるので、オリンピックなどの国際的な場でも積極的に取り入れられている(実際に現在のピクトグラムの多くは1964年東京オリンピックの際に考案されたもの)。

しかし東日本大震災では、これらのピクトグラムが多く置かれていたにもかかわらず多くの犠牲者が出た。震災を受けて浮かび上がったのは、ピクトグラムには限界があるという問題である。ピクトグラムだけでは、避難方向がわかっても具体的な道のりやその場所の海拔などを把握することができない。ピクトグラムを単独で表示するのではなく、「どの方向へ」「どの場所を目指して」「どのくらいの距離逃げればいいのか」などの情報もあわせてわかりやすく伝える方法を考える必要性が浮上した。

また、ピクトグラムの一般的なデメリットとしても挙げられることだが、文化の違いによる解釈の差を埋めることも一つの課題となった。避難場所を示すピクトグラムを例に挙げると、東日本大震災時は各自治体で様々な図柄が使われている状況であったが、外国人旅行者も多く来日する昨今では、同じ意味を持つピクトグラムは一律の図柄に統一設定される必要があった。それを鑑みて現在政府は、2020年東京五輪にむけて、避難場所を示すピクトグラムを全国的に統一した上で国際規格への登録を目指す作業を進めている。ただ一つ注意しなければならない点は、デザインを統一していくことはピクトグラムの具体性をどんどん排除していくことを意味する、という事実である。一目でみて意味が分かるという性質を維持しつつ、より多くの人に伝わるようにする作業は困難を伴うだろう。

災害時により役立つデザインをめざして新たな取り組みも始まっている。震災後、「日本ボーサイン協会」という団体ではピクトグラムをデジタル化し、画面上でピクトグラム自身が動き出す「アクトグラム」という新たなサインを開発した。音声メッセージも組み合わせることでより明確に人々の行動を喚起するサインづくりに取り組んでいる。

上記のように、災害時においてピクトグラムは生死を左右する重要な道標となる。それに加え、ピクトグラムだけでは必要な情報を補いきれない場合もありうる。それが先の震災によって示された。ピクトグラムがその効果を最大限発揮するためには、ニーズに合わせたデザインが考案される必要がある。

★ディスカッションの考察

新しく開発されているアクトグラムの効率性について議論したが、ピクトグラムに比べて伝えられる情報量がそこまで変わらなかったり、また制作費や維持費が高いということもあり、導入に対する疑問の声が多かった。



一方で、ピクトグラムの正確性を定期的に確認する必要性についても話し合った。

はじめに僕らは災害におけるピクトグラムの役割を再確認した。一つ目は言語の壁の突破。二つ目は混乱状況下の視覚的認識の助長である。そこで僕らは言語の壁というものはただ扱う言語が違うだけだというわけではないことに気づかされた。文化の壁の存在である。例えば異なる国で同じ意味を表すのに異なるハンドサインが使われていたり、色の意味が異なる国で違ったりなどである。結果として、真にユニバーサルなピクトグラムとは一目で誰でも理解できるということとそのピクトグラムを波及させることという二つの段階を経て完成すると結論づけた。例としてあげられるのはトイレ。今の時代、世界の端から端までおそらくトイレのサインは多くに人が理解できるだろう。これはなぜか。それはただトイレのピクトグラムがわかりやすいというだけではなく、世界がそのピクトグラムを積極的に取り入れ、あの赤と青の男女の間に縦線が入っているサインを人々が認識できるようになったからであろう。つまり、波及させることはピクトグラムがその役割を果たすことにおいてこれ以上なく重要なのだ。一方、混乱状況下での視覚的認識の助長という点では上記にもある津波からの避難という例があげられる。懸念としてあがったのは焦って避難している中での避難所や高台のサインは一瞬で理解出来ないだろうという点である。確かに例えば上図左下の建物に人が向かっているようなピクトグラムでは果たして建物に近づくというサインなのかその建物に逃げれば助かるというサインなのか明確に伝わってこない。具体的に動きを伝えるというピクトグラムはこういう点では優秀かもしれないが断線などのケースを考えると実用であるとは決して言えない。僕たちは短い期間で問題提起までしか出来なかったが、さらなるアイデアが必要だということは皆合意した。

(加筆：蘇家琪・久野 凌)

●あなたならどうしますか？

海外旅行先で自然災害（地震、津波、噴火、火事など）に遭遇したとします。例えば、2018年11月9日、中東ヨルダンのペトラ遺跡で起こった洪水のようなものです。あくまで観光で来たあなたは言葉も通じません。どう逃げますか？

旅行先で、災害にあうことはないだろうと思っていませんか？災害はいつでもどこでも起こり得ます。言語が通じない状況、それでも逃げなくてはならないという時、あなたはピクトグラムの情報を頼りにしますか？もしその情報の想定を超える災害だった場合はどうしますか？自分で判断ができるでしょうか？

旅行先で、ピクトグラムを確認したことはありますか？あれば、それはどのようなものでしたか？どういう特徴がわかりやすく、どういうところがわかりにくかったですか？

Pictograms in Disasters

Junichiro Furuno

A pictogram is a typical graphic symbol commonly referred to as "emoji" in Japanese, and it is a symbol for understanding its meaning and concept using the shape of meaning. It has an advantage that it can be understood by anyone regardless of age or nationality in order to express it as a visual diagram. Since information can be transmitted without language, it is actively adopted even in international occasions such as the Olympic Games. Most of the pictograms were invented in 1964 at the Tokyo Olympics.

However, in the Great East Japan Earthquake many casualties happened despite the fact that many of these pictograms were placed in a lot of places. The fact that the pictograms have limitations is the problem that came out after the earthquake disaster. With pictograms alone, even if we know the evacuation direction, we can not grasp concrete road and sea level of the place. Rather than displaying the pictogram alone, it became necessary to think about a way to communicate information such as "in which direction" "aiming at which place" "how far away should you run away" all together.

Also, as a general disadvantage of pictograms, filling up cultural gaps is a major issue. Take the example of a pictogram of evacuation. Various municipalities were using various symbols at the time of the Great East Japan Earthquake, but recently many foreign tourists come to Japan, the pictogram having the same meaning It was necessary to be set as a uniform symbol. In view of that, the government is now working towards registering to international standards after unifying the pictogram showing evacuation sites nationwide for the 2020 Tokyo Olympic Games. The only thing to watch out for is that the unification of design means to eliminate the concreteness of pictograms more and more. Working to make it more visible to people will maintain difficulties while maintaining the nature of meaning as seen at a glance.

A new initiative has also begun aiming for a more useful design in the event of a disaster. After the earthquake, the group called "Japan BoSign Association" digitized pictograms and developed a new sign called "Actogram" that pictograms themselves move on the screen. We are also working on creating a sign that evokes people's behavior more clearly by combining voice messages.



As mentioned above, in the event of a disaster the pictogram is an important signpost that determines life and death. In addition, it was indicated by the previous disaster that it might not be able to compensate the necessary information with pictogram alone. In order for the pictogram to exert its effect to the utmost, it is necessary to design a design tailored to the needs.

← 震災後にJISに登録された避難場所表示のピクトグラム
/registered pictograms after the earthquake

〈討論結果/discussion results〉

For the Actograms currently under development, we met the conclusion that they are still not ready to be used to counter disaster, for they were expensive, inefficient, and fragile to blackouts and other power source cuts.

On the other hand, we also discussed about the need of checking the accuracy of the pictograms once in a while.

First, we checked two roles pictograms play under the situation of a disaster. One was breaking the language barrier, and the other was the visual help of those who are confused in evacuating. We realized that the language barrier is not merely a matter of linguistics, but one of culture. For example, different hand signs are used in expressing the same concept in different countries, while the same color means the opposite meaning, etc. As a result, we agreed that pictograms become truly universal when they have these two factors: 1. that it is visually easy to understand, and 2. that it is fixated in many countries. The example for this kind of "universal" pictogram is the bathroom, the one with the blue man and red woman standing together with a vertical line between them. Nowadays, it is probably hard to find a person who doesn't recognize this pictogram as a bathroom. The reason behind this is not only because the bathroom pictogram is successful as a sign, but also because it is used by plenty of nations after its birth at 1964. Therefore, the significance of having nations use the same pictograms internationally is critical.

For the points on visually helping people in confusion, one example is the pictogram for evacuation from tsunamis. It was claimed as a major concern in the discussion that, for example, the pictogram of a person running away from a tsunami (page 25, down left) is ambiguous. The meaning of it is to evacuate to the building, but it could also be taken as to run away for the building, since the building is vulnerable and dangerous. Actograms could be a possible solution of this, for it shows more animated, specific moves, but concerning the danger of blackouts and cutting of other forms of power sources, it can be said that it is not the best way. We only got to the point to expose the problems pictograms in disasters have, but we all agreed to the point that more ideas are definitely needed.

Translation and interpretation by Kaki Su, Ryo Kuno

<参考文献/references > <http://www.thinktheearth.net/jp/sp/thinkdaily/news/art-design/1285bosign.html>

What would you do?

Let us assume that you encounter a type of natural disaster (earthquake, tsunami, volcano eruption, mountain fire.) For example, the November 2018 drought at Petra Ruins in Jordan is one. You are a tourist and you can't understand the language native to that place. How would you evacuate?

Aren't you believing that you will not encounter disasters when you are enjoying your time on vacation? Disasters strike wherever and whenever. In a situation where language doesn't convey meaning to satisfaction but you still have to evacuate for your life, would you follow the information drawn as pictograms? Can you make your own decisions?

Are there any pictograms that you found while traveling? What kind of pictograms were they? How were they effective, and how were they not effective?

ボランティアと日本文化における「甘え」

西澤 大志

土居健郎の「甘え」の定義

「甘え」という概念は、日本文化特有のものである。1971年出版のベストセラー『「甘え」の構造』では、精神分析学者である土居健郎が、甘えとは周りの人に好かれて依存できるようにしたいという、日本人特有の感情だと定義した。土居は、「甘え」に該当する言葉が多言語に見つからないことに着目し、「甘え」は日本人の心理と日本社会の構造をわかるための重要なキーワードだと評価した。



ボランティア精神とそれに対する甘え

復興庁によると、東日本大震災の避難者は前年より約4万9千人減ったが、なお約7万3千人（2月13日現在）にのぼる。福島県では東京電力福島第1原子力発電所事故などにより、約3万4千人が県外での避難生活を余儀なくされている。プレハブ仮設住宅で暮らす被災者は2月1日時点で岩手、宮城、福島の被災3県に約1万3千人。1995年の阪神大震災では発生から5年で解消したが、3県では解消の見通しが立っていない。

しかしその中には、もう避難勧告の対象に含まれていない者が自らの判断により避難している、自主避難者という人々が存在している。多くの者は、避難指示区域以外の地域に自宅があるが、未だ安全性を心配し戻っていないらしい。しかしながら、少数派ではあるが、仮設住宅は家賃が無償であることを主な理由として避難し続けている者もいる。このような者たちは、国家の支援に甘えており、復興税という形での負担を増やしている、と言っても否定することはできない。

自主避難者の意見

「甘えって言う人は自分が全く同じ立場になった時果たして同じ事を言えるのだろうか。」

ディスカッションのまとめ

実に多くの方々が災害によって被害を受けたために、国は様々な手段を介して災害のアフターケアなどを実施してきた。また、より小さな規模では、個人の寄付やボランティア活動などで間接的・直接的双方において援助が行われてきた。大量の支援物資が被災地に届き続けるのはこの上なく喜ばしいことではあるが、物量のインフレが進んでいるのではないかと、というのが我々の議論の焦点の一つであった。

- Problems with the welfare system
 - Discourages people to live on their own

●あなたならどうしますか？

自主避難者の意見：「甘えって言う人は自分が全く同じ立場になった時果たして同じ事を言えるのだろうか。」

例えば、ケースとして市から仮設住宅から移転のための引っ越し代として10万円が支給されました。しかし、とある市民は震災ボランティアに引っ越しを依頼し、10万円は懐に。この場合、確かにその市民の方が「甘え」の感情を抱き、引っ越し代支給の事を後で知ったボランティア側が憤るのも納得です。しかし、市民側も今後の生活が不安な現状があったとして、本当にその市民が悪いと断言できるのでしょうか？あなたならどうしますか？行政はどのような選択を取るべきだったのでしょうか？

The culture of *amae* and its presence in disaster relief

Taishi Nishizawa

In Japanese culture, *amae* is a behavior described as gaining closeness through a parent-child like relationship. Have you ever begged your parents to do something for you that you were perfectly capable of doing? Have you ever tried to get a friend to perform a task that you could just as easily do? Chances are, yes. In fact, everyone has experience of taking part in a bit of *amae*. So, what is *amae* anyway? Although there are varying definitions of the term, *amae* has been generally described as a culturally ingrained dependence on authority figures. In his renowned book *Anatomy of Dependence*, psychoanalyst Takeo Doi describes it as a unique Japanese need to be in good favor with and be able to depend on the people around oneself. Furthermore, Takeo commented that the culture of *amae* is key in understanding Japanese society given the lack of a corresponding term for *amae* in other languages.

So what does *amae* have to do with volunteering? Over the past few decades, Japan has experienced numerous major natural disasters, each stirring an outpour of support from all parts of the country. However, a growing number of people affected by the disasters have become overly dependent on aid from volunteers. After the Great East Japan Earthquake in 2011 (also known as the Tohoku earthquake), many whose houses were washed away by the tsunami were left with no choice but to live in temporary housing. As of February 2017, there were still about 50,000 evacuees living in temporary housing, according to Japan's Reconstruction Agency. While most of these people are simply unable to live elsewhere, a notable number of residents are opting to live there permanently; the temporary houses don't cost a penny for rent and can be seen by some as a more attractive and easier choice than living independently. This has led to some criticism over the legitimacy of the Japanese government's continued use of taxpayer money to support evacuees. Unfortunately, this controversy has caused people who genuinely depend on the aid to be affected as well.

References

Japan Reconstruction Agency, <http://www.reconstruction.go.jp/english/>, Jan of 2018

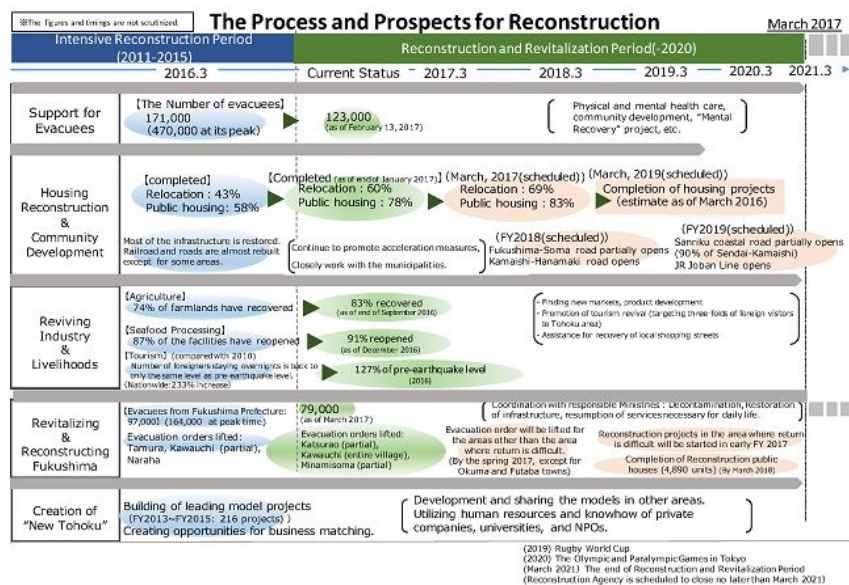
Ishinomaki KIZUNA project (石巻復興きずな新聞), <http://www.kizuna-shinbun.org/2017/09/07/blog-18/>, Sep/07/2017

Ishinomaki KIZUNA project (石巻復興きずな新聞)

<http://www.kizuna-shinbun.org/2017/11/25/blog-24/>

災害公営住宅について

<https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/337803.pdf>



(From the Japan Reconstruction Agency's webpage.)

Discussion Topics

- Why do you think this has continued to be a problem, 7 years after the disaster?
- What are your thoughts on the temporary housing?
- Do you think the Japanese government should pose stricter regulations and requirements for the people living in temporary housing?
- Why do you think other cultures don't have such a defined definition of amae?
- About 95% of the temporary housing is occupied. (As of Nov. 2017) Do you think more focus should be given from the federal government or the regional (ie. prefectural)

The Role of Volunteering

- Increased dependency on volunteers and aids

After the Great East Japan Earthquake, the outpour of support from volunteers and aids greatly helped the devastated areas to recuperate. The amount of support, both domestically and internationally, showed how societies can cooperate in times of urgency. However, certain efforts to help the victims have actually worked negatively on some cases. Through discussion, we reached to an agreement that the government should focus on making the victims self-sustainable as soon as possible. An excessive amount of aid, such as food, can actually hurt the victims and the economy. Local businesses will not be able to sell any of its products if the supply of aid doesn't cease after a while. We all came to the conclusion that while aid is certainly beneficial for the devastated areas, the supply should start to decrease to allow the local business to prosper again.

- Problems with the welfare system

The current system discourages many residents living at temporary houses to move to live in their own houses. Due to the fact that temporary housings don't require residents to pay any rent, the incentive to start looking for new places can be low. We think that the government should work to change its system. They can make it easier for the residents to search for new homes by changing their policy. Once residents move out of the temporary houses, they aren't allowed to move back in, even if it were for a short time; this encourages more residents to stay longer at temporary housing

until they can find the perfect house. However, since it is expected that the government will run out of money for temporary housing, it has become even more crucial that the residents become self-sustainable. It is even more important for the residents to have a steady income so that they can pay for rent in the future.

Translation and interpretation by Taishi Nishizawa

Edited by Robert May, William May, and Ziyang Lei

What would you do?

An evacuee's opinion: "when people talk about *amae* of us evacuees, can they still say the same words when they become the evacuees themselves?"

For example, a city gave out ¥100,000 to the citizens who lived in temporary housings as fee to move to their new homes. However, a citizen asked a group of volunteers to help them with the moving, and the ¥100,000 became his pocket money. This is clearly a type of *amae* of the citizen towards the volunteers, and indeed if the volunteers have known about the money, they would not have helped the citizen with his moving to his new house. Nevertheless, it is also true that the citizen was concerned of his life after the moving, and maybe he was simply trying to prepare for what might happen in the future from now. Can we assert that the citizen is guilty for acting in such ways? How would you react? How should've the city government acted in these cases?

助け合いの精神と物資不足の価格高騰について

熊谷 勇輝

大規模な自然災害が起こり莫大な被害が出た際、多くの善良な市民は被災者が物資に苦しまないよう「助け合い」の精神に則ってさまざまな支援を行う。その形態は多岐に渡っており、たとえば義捐金やボランティア、古着などの寄付、千羽鶴や応援メッセージ、寄せ書きの作成、芸能人の来訪などが筆頭に挙げられるだろう。近年は個人のみならず企業としても支援を行うことも多くなり、特に平成23年の東日本大震災もあったからか、日本社会が全体として復興に対する姿勢が強くなった傾向が見受けられるようになった。

しかしながら、近年このような「助け合い」の精神に由来する支援物資が「第二の災害」となっていることが非常に多いという指摘がなされている。平成28年熊本地震の際には「千羽鶴の寄付は全く意味もない上に邪魔なだけだ」という旨のツイートが8万回以上リツイートされ大論争^[1]になり、西日本を中心とした平成30年7月豪雨でも同様の現象が起こり賛否両論を巻き起こした。

この種の問題が認識され始めたのは1993年の北海道南西沖地震である。このとき衣類だけでも約1,200トンが不要となり焼却処分され、処分費用約1億2千万円が自治体の負担となってしまった。他にも1995年の阪神・淡路大震災の際には100万個以上もの小包が届いてしまったためにボランティアの人手がかなり割られることとなった。これらの多くは個人が、「善良な市民」が「自身の良心」に従って送ったものであった。これらは近年自衛隊の救助活動さえも妨げていることが指摘されている。

以上だけを見ると物資の支援は必要ではないと考えるかもしれない。しかし、当然ながら、災害が起きた際は物資自体が不足しているわけで、義捐金だけが集まったところですぐには役に立たないのである。したがって物資支援をする際にはまずこの点を省みる必要がある。すなわち、被災者のニーズを正しく把握するということだ。

このことがあまり考えられていなかったために、いわば「一方的な善意の押し付け」とも言える事態が起こってきたといえよう。古着や千羽鶴も良かれと思って行なっている分、被災者も断りにくいし、実際「個人の支援は控えていただきたい」と発表した自治体には「せっかく善意で助けてあげているのに自粛せよとはどういうことか」という意見も数多く出ている。彼らにとって支援や寄付は本当に被災者のことを思った上での行動なのだろうか、決して自分が善人であることを確認しようとする行為ではなく。

そしてこの点を考えると次の疑問が出てくる：「偽善はやるべきではないのか？」これは筆者が東日本大震災のときに地元の方から聞いた話だが、弁当屋を営んでいた店主は被害が起こった際に無償で弁当を配布したが、たまたま水を貯蓄していた雑貨屋は自己の利益を考えて水の値段を釣り上げてしまい、住人によって村八分にあい夜逃げをしてしまった。が、もし自分が善人であることを確認するためだけに支援を行うことが望ましくないものとするれば、仮に万が一弁当屋が何らかの見返りを期待して弁当を配布していたと仮定すると、弁当屋と雑貨屋は善悪の基準においてはほぼ同じと考えられるのだろうか？

振り返ってみると「助け合いの精神」というのも実は見返りを求めているように思えるし、それでは一体支援とは何だろうかというところに、今一度我々は反省してみる時期が来ているのかもしれない。日本は地震大国である。今後いかに物質的な面とともに精神的な面でも対策を立てられるかは防災において非常に重要な役割を担うことは明白であろう。

参考文献

[1] <https://togetter.com/li/967551>

【論点】

1. 一方的な善意の押しつけを上手く支援に役立たせるにはどうしたらよいか？
2. 「やらない善よりやる偽善」というのは正しいのか？

まず前提として「適切でないボランティア活動や寄付は支援を受ける側を助けるはおろか、被害を与えてしまう可能性がある」ということに一同合意した。そこで問題点としてあげられたのは限られた物資の不均等な配分、そして義捐の倫理的解釈である。まずは物資の不均等な配分という点について。上記雑貨屋の話は議論が対立した。ある生徒は「雑貨屋はなんら悪いことはしていない、経済学的にはむしろ正しい決断である」と言ったのに対し、別の生徒は「確かに論理的に考えれば雑貨屋は正しかったのかもしれないが、果たして倫理的にそれはあっていることなのだろうか」などと疑問を投げかけていた。ただ一つ注目すべきはこうまで雑貨屋が議論を巻き起こしているのは弁当屋が比較対象にあるからであるということもあげられるということだ。世の中の人が10人中10人正しい行為であるとでも言うであろう弁当屋の行為と比べることで雑貨屋の行為を単純に悪であると断定することも出来ない。そこで偽善という行為が認められるかということに焦点が当てられた。具体的には弁当屋の件である。もし弁当屋が何かしらの見返りを受けることを見越して弁当を配っていたらどうだろうか。これは真に善であるとは断言できない。しかし事実この弁当を配るという行為は災害下における適切な選択であり、結果として善であるとも言える。ここでChoate生、開成生ともにたとえ偽善であろうとも結果として善をもたらすなら行動をとることは決して悪くはないという結論に至った。

(加筆：久野 凌)

●あなたはどう思いますか？

物資不足の環境下でモノの価格が高騰するのは不変の原理です。しかし、今回の弁当屋と雑貨屋の案件のように、災害下という困難な状況下で物資を無料で配ることや値段を大幅に釣り上げることは経済学的にはなんら不当ではないはずです。また、被災地で発生する略奪行為なども考えると、ある意味で弁当屋は正当防衛のようなことをしたと取ることもできます。そういう状況にあなたが陥った時、あなたが弁当屋や雑貨屋の立場なら、どう行動をとりますか？また、それを受け取る・買う側だったらどうしますか？

The Spirit of Mutual Aid and the Lack of Supplies in Damaged Areas

Yuki Kumagae

A lot of generous citizens support the victims who are struck by large-scale natural disasters through donations, volunteer, supplies, *Senbazuru* (paper cranes), words of support, and the like, in accordance with the spirit of mutual aid. Such tendencies may be seen as especially strong in the 2011 Tōhoku earthquake and tsunami struck as it affected the Tohoku area as well as the rest of Japan.

However, especially in recent years, people start to recognize that such supplies derived from the spirit of mutual aid can be a great obstacle to supporting the afflicted area. An example can be seen on Twitter; a tweet that insisted on the extraneousness of *Senbazuru* was retweeted by more than eighty thousand times and triggered an Internet storm.

Obviously it is reckless to conclude that we should not donate supplies. Even if a person of wisdom says that money is the seed of conflict, with no physical distribution, all of us will die after all. All we have to do first is to understand what they really need. A considerable number of people are unconscious hucksters who sell their egoistic *kindness* for free.

And considering this point, the following question arises: Should acts of hypocrisy not be done if they help those around them? This is a story I heard from the local people at the time of the Great East Japan Earthquake. After the earthquake, a shopkeeper operating a lunch shop handed out free lunches to affected victims. However, the owner of a convenience store who had a stock of water, chose to sell the water instead, eventually fleeing the town with the money. If we assume that it is not desirable to provide support only to confirm that you are a good person, assuming that the lunch box shop delivered the lunch in expectation of some kind of return, would it be considered that the general store is on similar moral ground?

In retrospect, if "spirit of mutual respect" seems to be actually seeking return, then it may be time for us to reflect on our own altruism. Japan is substantially prone to earthquakes. It is quite obvious that how to set up measures in terms of material and mental aspects from now on plays a very important role in disaster prevention.

1. How can we make such kindness helpful in supporting damaged areas?

2. Is it true that *hypocrisy is better than doing nothing*?

- misinformed volunteering and donations could potentially be harmful to the areas and them people receiving the aid
 - impede the development of local industries
 - suboptimal distribution of supplies
- even though the more devastated area is likely to need more help, it is important to keep the local community in mind and consider volunteer work within one's vicinities

- the intention should not be the main focus of attention regarding people's acts of kindness, as long as the acts lead to positive outcomes; however, the sensitivity of the victims of natural disasters should be taken into consideration

Translation and interpretation by Kaki Su, Ziyang Lei

Edited by Robert May, William May, and Ziyang Lei

What would you do?

It is an inflexible rule that commodities increase their price when everyone needs them. If you were the owners of the lunch shop or the convenience store, how would you take action? If you were the receivers of the lunches or the consumers of the water, how would you react against them?

混乱の中での情報の重要性について

柚木一心

2011年3月11日14時46分頃、観測史上最大規模であるマグニチュード9の地震が三陸沖の太平洋で発生した。7年が過ぎた今でもなお、東日本大震災という名を持ったこの自然災害は各地に爪痕を残したままである。

多種多様な課題や進歩を生み出した一連の出来事の中でも特に取り上げて然るべきなのは、「情報の扱い方」という観点であろう。技術の発展に伴い、時間を経るごとにマスメディアやSNSの情報の拡散・支配力はみるみる増加しつつある。そしてそれにより救われた命が多いのもまた事実である。地震の発生を知らせる速報や避難警報などが発令されたために多くの人が人的被害を受けずに済んだのだ。

震災当日に何が起こったか。岩手県陸前高田市をはじめとして、一連の災害の最中に庁舎のサーバールームが破壊されるなどして情報システムやデータを損失し、情報の管理・伝達が遅れてしまった自治体が発生した。また、長時間の停電により処理が遅れてしまった地域やアクセスが集中してしまい情報が伝達できなかった地域もあったとのことだ。本来受け取って然るべき情報が届かなかったことにより、津波の襲来に気付くことができず亡くなってしまった方がいた。さらには、デジタル端末を利用していない高齢者層などが情報を受け取る手段が限られており、情報の伝達が難しかったという状態もあったようだ。

さらに明らかになった問題点は、情報の錯綜と誤認である。TwitterなどのSNSではウソの救援要請が書き込まれたり冗談にならないデマが流れたりしていた。また、大いに懸念すべきことであるが、原発の危険度は目に見えていたにもかかわらず、当時の枝野官房長官は「メルtdownはしていない」という発言を繰り返し行い、多数の人々が実態を知ることでもできず被曝してしまったということさえあった。

確かに情報が早く正確に伝わらなかったというのは取り上げて行く必要のある課題であろう。しかし、情報という概念について本当に注目すべきなのは、その驚くべき拡散力とスピード、そして潜在的な影響力であろう。宮城県気仙沼市で実際にあった出来事を取り上げたいと思う。母から公民館に取り残されているというメールを受けたイギリスにいた男性が、Twitterに「児童施設の園長である私の母が、施設の子供たち10名と、避難先の宮城県気仙沼市の第一公民館の3階に、まだ取り残されています。」という投稿を載せた。ツイートは瞬く間に拡散され、当時震災対応中だった東京都副知事の猪瀬氏の目にとまり救助活動の決断が下された。驚くべきことに、公民館には446人も避難者が取り残されていたことが救助活動をきっかけに判明し、2日間をかけて全員が救助された。1万キロ離れた土地からのたった一つのツイートをきっかけに446の命が失われずに済んだのだ。他にも、テレビで食料が足りていないと放送されるや否や大量の救援物資が届いたり、地域ごとの詳細な被害状況が伝えられたりと、情報というツールは最大限に活用されていたと言っていいであろう。

メディアの働きについて、メディア・ワンという会社の震災についてのコメントを引用したいと思う。

『どこそこの避難所で食糧が足りないと放送されるや否や、日本全国から食べきれないほどのおにぎりやパンが届く。電話もメールも通じず、一切連絡が取れなかった親戚を、テレビ画面を通じて発見する。もちろん、食糧が余りすぎた等、支援物資のミスマッチングを解消するために、ネット、特にソーシャルメディア（Twitterなど）と呼ばれるものが役立ったのも事実だ。

きめ細かな支援の妨げになる、という理由でテレビが批判されたこともあった。しかし、あの時、僕たちにできたことは被災地の現状という「情報」を日本中に発信し、被災地にフィードバックすることだった。「瞬時」に「大量」の「情報」を「投下」することによって解決された問題も非常に多かったように思う。そう、「情報」は一時期、東北の人々にとって最大の「救援物資」だったとも言える。』

まさにその通りであろう。予想だにできなかった大災害に襲われ、準備もできていない命の危機に瞬時にさらされる。そのような状況に投げ込まれた人々が信用できるのは、自分に与えられた「情報」だけなのだ。限られた時間しか残されておらず、極限状態に追い込まれてしまうような人々は、周りに散在する情報を鵜呑みにし、それに基づいた行動を取らざるを得ないのだ。

東日本大震災を経て、我々日本人は繰り返し起こる震災に対してどのように対処していくべきか、より真剣に模索するようになってきた。そんないまだからこそ、一人一人が発信していく情報が甚大な影響を与えかねないということを理解し、混乱の中人命を救うことができる情報を大切にすべきであろう。

ディスカッションの内容

後日に行われたディスカッションにおいてもっとも大きな焦点となったのは、如何に精度の低い・嘘の情報を判別し対応するべきかであった。SNSでそういう類の情報が大量に流れているのは悲しい事実であるが、それらの情報が正しいかどうかを判断するためには、情報に含まれるキーワードを検索にかけてみたり信頼できる発信元かどうか確かめたり、また似たような情報を探して相互的に確認したりと慎重に情報と向き合う必要があるだろうという結論に至った。

また、政府が情報を巡る議論に介入しなすぎるために誤った情報が横行してしまっている現状や、情報を発信する立場にいる人々に責任感が欠けていることがあることなどが問題点としてあげられた。

●あなたならどうしますか？

東日本大震災時に原発が爆発後すぐの日の午前中、「原発の爆発により放射能に汚染された雨が午後から降るため、外出を控えるようにして下さい。このことを一人でも多くの人に流して下さい。」といった内容のチェーンメールが実際にありました。その日は本当に午後からは雨の予報が出ていました。このメールをもし親しい友人から受け取った時、本当かも・・・と思いませんか？そのメールを送った友人も親切心から送っていると思われれます。あなたは「本当かもしれない、もし本当でなくても、他の人に送った方がいいのではないかと迷いませんか？あなたはどうかどう行動しますか？

The Importance of Information

Isshin Yunoki

At 14:46 on March 11th, 2011, a devastating earthquake and tsunami struck the east coast of Japan. 7 years have passed since the Tohoku earthquake, and Japan is still facing enormous amount of tasks such as the remained debris and taking care of remained families and mentally/physically damaged people.

Both challenges and improvements have been brought to light by the fatal Tohoku incident. Among those, we must seriously consider the use, impact, and importance hidden within the concept of "information". With recent technological advancements, people can send vast amounts of information in incredibly short time intervals, and in fact, during the extreme conditions following sudden disaster, many people were saved by information of rescue requirement sent from anonymous people.

Despite the benefit of information resources, some people were unable to perceive information about surrounding circumstances where everything was destroyed and people are suffering the problem of lacking resource, as well as evacuation announcements from the government. For instance, in several cities like Takada in the Iwate district, the server room of the government office was ruined and data as current situation were lost, preventing the distribution of effective information. Furthermore, due to excessive traffic of data through the Internet, some devices became unable to obtain network information. Those obstacles to obtaining information caused deaths that could be avoided. Furthermore, there was also a considerable amount of misleading information and fake data that could possibly have confused people and waylaid rescue and recovery operations.


Even though there are several serious problems caused by incorrect or delayed information, what we truly have to learn is the hidden strength of information. It has great ability to widely spread, to affect large amount of people and to actually save incredible number of lives. At the moment when disaster occurred, a man in England tweeted: "My mother, who is the principal of children's facility, became isolated in the 3rd floor of the shelter with 10 children". This post has instantly shared among vast number of users and eventually led to the decision of the rescue operation by the government. Surprisingly, the rescue party found that there were 446 people instead of 10 children remained in the shelter, and all of them had been saved. Additionally, vast amount of relief supplies including food and water had provided to particular areas where was introduced as damaged in the TV. These facts obviously shows that the potential ability of information resource is tremendous.

As my conclusion, I would like to introduce the message produced by Media · One.

"Once there was an announcement about the demand of food, more than enough amount of rice ball and bread had been sent from all over the whole country. People found their families through the TV screen. Of course the social media as Twitter had contributed to solve the mismatch of rescue commodity quantity. All we could do is to provide the reality of devastated places toward our country and feed it back to the damaged areas. By spoiling vast amount of information in exceedingly short time period, considerable number of problems had been solved. Yes indeed, information was truly the most important rescue resource for people living in Tohoku."

[Discussion]

The first idea we discussed was the existence of false reports in social media and the inaccurate information announced by the government. We argued that, in order to avoid being confused by false information, we need to cross-reference the information with other relative information and



confirm the accuracy. Additionally, we claimed that the information on the internet is scattered around and is not well organized, and thus we could look up keywords included in the information and check the history of publisher to consider whether it is reliable or not. Last but not least, we discussed the issues of responsibility. We thought the government should be much more involved in social media either to provide accurate information or to overwatch incorrect information.

Translation and interpretation by Isshin Yunoki
Edited by Robert May, William May, Ziyang Lei

What would you do?

Soon in the morning after the nuclear reactor exploded in Fukushima, 2011, chain letters were sent everywhere mentioning that “the explosion would cause a rain that includes radioactive substances, so please don’t go outside in the afternoon.” If you receive this type of email from your best friend, will you believe it? The friend maybe is just trying to help you and is emailing this. Can you not hesitate to cut the chain of these letters? How would you react?

平成30年7月豪雨（西日本豪雨）について

白石 航太郎

I. 平成30年7月豪雨（西日本豪雨）とは？

2018年6月28日から7月5日にかけて日本付近に停滞した前線や6月29日に日本の南で発生した台風7号の影響で、日本付近に温かく非常に湿った空気が供給され続けたことで西日本を中心に全国的に広い範囲で記録的な大雨となった。気象庁ではこの2018年6月28日から7月8日にかけての豪雨とそれに伴う被害をまとめて、平成30年7月豪雨と呼んでいる。（メディアなどはこの命名がされる前に暫定的につけた名前である西日本豪雨を続けて用いていることも多い。）

四国地方や東海地方などでは平年の7月の月降水量の2倍～4倍の大雨がこの期間のみで降るなど広い範囲において記録的な大雨となり、それに伴った河川の氾濫、浸水害、土砂災害などや台風7号の暴風の影響も重なったことで、全国各地に甚大な被害がもたらされた。また、全国各地で断水や電話の不通等のライフラインへの被害や鉄道の運休等の交通障害も発生した。豪雨から約1か月が経った8月4日時点で死者は計225人、行方不明者は11人を数え、避難者も3600人以上にのぼっている。今回の豪雨は1982年に300人を超える死者・行方不明者を出した長崎大水害以降、豪雨災害としては最悪の被害となった。

*参考 西日本豪雨の主な被災状況（8月3日午後6時時点の関係省庁まとめ）

- ・避難者 3657人
- ・住宅の全壊・半壊・一部損壊 1万4050棟
- ・床下浸水 2万942棟
- ・農林水産被害 2469億1千万円



↑西日本豪雨で見られた被害の例

左は大雨に伴う土砂災害に見舞われた住宅街の様子を撮ったもので、右は大雨による浸水被害を上空から撮影したものである。

II. 災害時の避難所での対応について

避難者のほとんどが災害によってもともと暮らしていた住宅が被害を受けてしまい、いわゆる“避難所”に身を寄せているが、この避難所での生活における対応が災害後の被災者へのケアの一環として重要であるにも関わらず問題が多い。そこでここでは今回の豪雨に関連して“災害時の避難所での対応”という点について言及していきたいと思う。

A) 避難者のメンタル面でのケアについて

どのような災害においても、避難者は自身の災害での被害による心の傷に重ねて避難所での生活から来る心労もあり精神的に厳しい状態に追い込まれるケースが非常に多く、そのような人々への心のケアは欠かせない避難所での対応の一つである。これに対して内閣府はボランティアでメンタルケアにあたる人々に対しガイドラインを作成し、その必要性をより多くの人に知ってもらうよう努めるなどの対応をしている。実際に国立病院などで働いている臨床心理士の人々が「こころのケアチーム」として現地で健康状態モニタリングも含めたボランティア活動を行うなど成果も出始めている。しかし、現状では派遣されたケアスタッフ同士の連携がうまく取り切れておらず、被災者の数に対して十分な対応が仕切れていないなど多くの課題がある。

B) 避難者のストレス軽減について

この点については今回の西日本豪雨では過去の災害の経験を生かして避難者に配慮した避難所の環境作りに比較的近づいてきているとの評価が多い。具体的には全国から集められた支援金などをもとにした避難所に段ボールや冷房を設置、全国から集められた支援品などの配布などをより効率よく多くの被災者にサービスしたことなどが挙げられた。ただ、それでも支援が行き届いていない被災者も少なからずおり、また、集められた支援品の中には被災者が迷惑と感じてしまうものも存在するなど避難者のストレス軽減に向けてまだまだ改善しなくてはならない点は多く存在していると言える。

C) 避難所における新たな試みについて

西日本豪雨に対する避難所でのボランティア活動の中には最近新たに被災者支援の一環として始められた試みもいくつか見られた。そのうちの一つが非常用発電機を用いた充電ボランティアである。災害時においてライフラインが一時的に途絶えてしまうことは必ず起こりうることであるが、その中でも災害時に人命を守る拠点となる病院などではたとえ電力の供給が途切れても補うことができるような設備が必要不可欠であるとされ、非常用電源や非常用バッテリーがほとんどの場合で設置されている。そのような場所においてボランティアで集まった人々がライフラインが復旧するまでの間、電力が尽きそうなバッテリーに対し充電を行う活動がみられた。他にも避難所での熱中症対策など様々な面で新たな試みがみられた。全体として避難所での被災者へのボランティア活動は広まってきているが、まだまだ課題は多いということが言える。

議論の結果

浮き彫りになった問題は支援の偏りである。西日本豪雨の避難者支援における程度の差が広島など被害が大きかった地域と九州の比較的被害が小さかった地域でボランティア数などの偏りが被害の偏りよりも大きいのだ。例えば被害の比較的少ない熊本や福岡では大学生がニュースをみてサークルなどで広島にボランティアに行くことがあった。しかし彼らは広島の災害にしか目を向けておらず、地元である熊本や福岡に必要な支援は決してしていなかったのである。被害は「比較的小さい」とは言いつつも皆無な訳ではない。いわゆる「木を見て森を見ず」状態だ。ではこれはどのように防げるのだろうか？

一つはSNSの的な活用である。「情報の重要性」の項目でも触れられているように、災害環境下におけるSNSは、真偽こそ定かではないものの、情報の即時伝達という点では非常に優秀である。ましてやこのケース、被害が少ないながらも支援が必要な地域にとってSNSは手軽かつ強力な手段になるだろう。

もう一つは地元新聞やラジオ局である。上記の場合、大学生は地元に住んでいる場合がほとんどであろう。地元紙がもしその学生が住んでいる地域の支援の必要性を訴えておけば、大学生たちは支援が足りているであろう広島に向かうことなく地元を手伝っていただろう。このように、物事の全体をみて自分、かつ相手にとって一番となることを選択して行動する必要がある。



●あなたならどうしますか？

話題になったのはボランティア活動の支援の偏りについて。山口の大学生団体が自らの県の災害支援をせずにニュースで取り上げられている広島に向かったのは前述の通りです。また、「どこかお遊び感覚が拭えない」というコメントもあげられており、ボランティア活動そのものが疑問視されている場面も少なくはありません。

広範囲に起きた災害時、支援に入ろうとする時、あなたは何を見てどこに向かいますか？

Torrential Rain in Japan and Correspondence at Evacuation Shelters

Kotaro Shiraishi

I . What is the "Nishinohon-gouu"?

From June 28 to July 8, 2018, there was a record-breaking torrential rain, mainly in Western Japan, called "*Nishinohon-Gouu*." The causes were the stationary front that remained over Japan from June 28 to July 5 and the influence of the seventh typhoon of the year, which made landfall in July. The Japan Meteorological Agency named the heavy rain "*Heisei sanjyunen sichigatu Gouu* (Torrential Rain of July 2018)". The media often continue to call the rainfall by its colloquial name, "*Nishinohon-Gouu*."

Heavy rain amounting to two to four times the typical monthly precipitation of July besieged the Shikoku and Tokai regions. This record-breaking heavy rain caused river flooding, inundation damage, and landslide disasters. In addition, damage to utilities such as water cutoff, telephone line cuts, and traffic disorder like railway cancellations occurred all over the country. By August 4, about a month after the heavy rain, there were 225 deaths, 11 missing people, and more than 3,600 evacuees. This torrential rain caused the worst damage compared to any other disaster of its type since the great flood of Nagasaki in 1982.

* Reference - About the damage of Nishi-Nippon torrential rain (As of 6 pm on August 3)

- 3,657 evacuees
- 10,450 completely destroyed, partially destroyed or partially damaged houses
- 20,942 houses with flooding under floors
- About 247 billion yen(≒2.22 billion USD) damage to agriculture, forestry and fisheries



↑ Examples of damage seen caused by torrential rain

On the left is picture of one of the residential areas struck by a landslide following the heavy rain, and on the right is photo of the flood damage caused by the flooding.

II . How to help victims of disasters at evacuation shelters?

In this case of torrential rain, there are still many evacuees even though more than a month has passed since the disaster. Most of the evacuees currently live in evacuation shelters built by the local government because the houses they used to live in were destroyed. However, there are many problems with the current support and care system in place for the survivors in evacuation shelters.

A) About mental care of evacuees

In any case of disasters, many evacuees suffer mental damage caused by the disaster and by the change of lifestyle at the evacuation shelter. Therefore, mental care for evacuees is essential to have at the evacuation centers. To respond to this need, the Cabinet Office made guidelines for people who are considering mental care volunteering and for people who want to know more about the mental stress that arises from living in an evacuation center. For now, the results of these efforts are beginning to appear. For example, clinical psychologists who work for national hospitals made a volunteering group called the “Mental Health Care Team” to diagnose the mental states of victims. However, there are still some problems that they have to deal with, such as not being able to respond sufficiently to the number of victims because of a lack of cooperation between the volunteer clinical psychologists.

B) Stress relief of evacuees

After the torrential rain in Western Japan this year, many people assert that evacuation shelters became more comfortable for evacuees compared to previous shelters. Specifically, at this time, it was more efficient to distribute water, food, and cardboard used for compartments. In addition, installation of air conditioners was made possible thanks to nationwide donations, and lots of supplies have been gathered from across the country to support victims. However, there are still some victims who have not received enough support, and there are some low quality supplies arriving from around the nation, so there is certainly room for improvement.

C) New attempts at evacuation shelters

As part of the volunteer response to the recent torrential rains, there were some new attempts at evacuation shelters. One of them is a volunteer service which uses an emergency generator. Disruption of utilities at the time of a disaster is an inevitable problem, so places for protecting human life such as hospitals need backup power systems. So in most cases, they have emergency power or emergency batteries, but these devices can easily run out of energy. At such times, volunteers charge batteries that are almost running out of power until utilities are restored. Other initiatives, such as measures against heatstroke in evacuation shelters, have been stated. As a whole, volunteer activities for victims in evacuation shelters are becoming widespread, but there are still many problems and we have to continue making efforts to improve the system.

<議論結果/discussion results>

It is important to understand and help those in need locally when trying to help evacuees in shelters. Often, with the rise of SNS and online news, a few specific disaster cases are highly publicized and at times over reported. This results in an influx of volunteers, often from across the country, drawing manpower away from their local disaster situations. For example, after the *nishinohon-gouu*, many volunteers flooded into Hiroshima, due to its prevalence in news on the torrent. While the rains affected locations all over the country, many volunteers chose to travel to Hiroshima instead of helping their own locations.

To provide support to a wider area of affected populations, we propose that local media outlets such as newspapers and television stations should cover more news on local areas in need of volunteer support.

Seeing many places report that the volunteering and reconstruction process was efficient, we are hopeful that the trend of rising awareness towards volunteering activities will continue in Japan.

復興とは

佐藤 遼

歴史に残るような自然災害は、人々の生活に組み込まれてきた“あたりまえ”を、おどろおどろしい恐怖とともに奪い去っていく、らしい。私は震災などによって自分の生活やその基盤が破壊されるという経験をしたことはないが、私の住む家、住む街、愛用していた机や本や服といったものが、例えば津波に吞まれ、何もできないままに全て消え去ってしまう。そう想像するだけで、なんとも言えない絶望感が広がる。当然これはあくまで想像であって、実際に経験したならば、リアリティーを伴いすぎてリアリティーを失ったようなその光景、境遇を眼前に、想像の何千倍もの言葉にならない気持ちに吞まれるだろう。ただでさえ途方にくれるような境遇に加え、実際に被害に遭われた方の殆どは、誰かしら近い人を失っているだろう。その心情は想像しようとも想像しきれず、説明しようとも説明しきれず、その場にいなければ決して経験できないものなのだ。

生活基盤や大切な人を失っても、命を失わなかった方々は幸運と言っているのだろうか。この問いは個人の問題に帰着する面が大きいため差し置くとして、生き残ったからには再び生活基盤といったものを取り戻し、通常の生活に戻るのがベストと考えるのが一般的であろう。復興という概念はだからこそ存在する。

さて、その復興を担うのは一義的には国だと思われるが、その国としての立場を表明している側面も大きいと考えられる東日本大震災復興基本法ではどう記述されているか。そもそも復興とは何か、という問いに対して、当該法律の「現在及び将来の国民が安心して豊かな生活を営むことができる経済社会の実現」という記述は大いに参考になろう。「安心」という側面は、復興の先の災害対策の強化等によって実現されるものと解釈し、今回は「豊かな生活」というコトバに焦点を当てて考察したい。

豊かな生活といってもその指すところは非常に曖昧である。そもそも災害が起こる前の生活は“豊か”だったのか、環境の整った家に住めたら“豊か”なのか、いい食事が取れたら豊かなのか。深く考えようとするとキリがない。ならば普遍的な価値観に基づいても“豊か”ではないと判断可能で、かつ災害がなければ至らなかった状態をまずは挙げてみたい。そうした事案は数々の書籍、サイト、報道番組などが指摘している。

例えば職業を失う。これだけでも人間にとって非常に重いことなのだ。職業は単に生計を立てるにとどまらず、人生の重要な部分と連関し、重要な意味を持つ。新潟大学准教授の栗田氏によると、「お金を稼ぐばかりが職業の目的ではない。(中略)職業には、多かれ少なかれ、その人の人生観や世界観が反映されるところがあるだろうし、職業からその人の人生観や世界観が影響を受けることもあるだろう。こう考えれば、職業は、お金を稼ぐということ以上に、その人の生き方そのものにかかわる側面をもつといえる。」と指摘されるように、職業という生きがいを奪われた方々への精神的なダメージも大きく、実際に『震災学入門—死生観からの社会構想』(東北学院大学教授 金菱清著 ちくま新書)で「仮設住宅などで、明らかに認知症の症状が増えているという。ふるさとを喪失してしまい、場所から場所への空間の移動もその大きな要因だろう。実は失われたふるさとでも、津波で流された住宅跡地で畑を耕している高齢者の顔に笑顔が戻ることがあるという。高齢者らが主体的に物事に働きかけることは、常にボランティアなどの手助けによって当たり前のように受け身になることとは異なり、睡眠障害や認知症の予防にも役立つという。」とある。

こうしてそれまで精神的な支柱となっていたものを失った方々の一部が直面しているのは、復興公営住宅に移り住んだときのコミュニティからの孤立だ。『復興<災害>—阪神・淡路大震災と東日本大震災』(立命館大学教授・神戸大名譽教授 潮崎塩崎賢明著 岩波新書)は「孤独死とは、①低所得、②慢性疾患、③社会的孤立、④劣悪環境という四条件のもとに、病死・自死にいたることである。(中略)なぜ、

仮設住宅や復興公営住宅でこのように孤独死が発生し、とどまることがないのか。(中略) 震災で家や財産、仕事を失い一気に貧困のどん底に落とされたり、家族をなくして希望を失いアルコール依存症に陥ったりといった例や、食事作りや家事などの生活ノウハウに乏しい中高年男性が孤独死に至る例が、その間の事情を物語る。しかし、そうした個々人の事情を越えて、仮設住宅や復興公営住宅が「もたらした被災者の生活環境の変化に注目しなければならない(中略)偶然街で出会って立ち話をしたり、それとなく眺めてお互い確認したりするような、そこはかとない交流が日常生活の大部分を占めている。それらは「動線の交流」「視線の交流」と呼ぶことができる。たまたま動線が交わったことで生まれる交流や、互いに視線をかわす、会釈するといった交流である。日常生活のこのような偶然的ともいえる交流がじつはコミュニティの重要な実体である。しかもこれらは、決して偶然ではなく、その地域における生活の構造が生み出しているものであって、それが失われては、生活が成り立たない人々が多数いるのである。郊外・臨海部、大規模・高層といった特徴を持つ復興公営住宅に移ったことで、そのようなコミュニティが失われ、社会的接点が少なく、貧困・アルコール依存症などを抱える人々を以前にもまして孤立化に追いやり、ついには孤独死にいたらしめたと見るができる。」と復興の過程での孤独死を取り上げ、こうした復興途上で健康や精神状態を害し、ついには亡くなってしまうような方が出る状態を「復興災害」として取り扱った。同資料によると応急仮設住宅における孤独死の数は112人にのぼり、復興庁によると2017年9月末に災害関連死の数は3089人に達している。

確かに、政府によってハード面での復興は進んだかもしれない。多額の予算を投じて、瓦礫の撤去に道路の再建、より強固な防潮堤の建設など、従来あった街の姿を取り戻すために着々とインフラが整っているようにも思える。現に復興庁が2017年11月に出した『東日本大震災からの復興の状況に関する報告』には「政府は「東日本大震災からの復興の基本方針」(平成23年7月29日東日本大震災復興対策本部決定)において、復興期間を平成32年度までの10年間と定め、復旧・復興に向けて、総力を挙げて取り組んできた。こうした取組の結果、自身・津波被災地域においては、生活に密着したインフラの復旧はほぼ終了し、産業・生業の再生も着実に進展しており、復興は新たなステージを迎えつつある。」とある。しかし、先に指摘した精神的な面ではやはり被災者が置いてけぼりにされている側面も大きいのではないか。そうした、政府が高々と掲げる復興政策と実際の被災者の置かれる精神的状況との乖離について、先に上げた『震災学入門—死生観からの社会構想』は明快な指摘をしている。以下の通りだ。

「何もここ(沿岸部)で都会のような立派な暮らしを望んでいるのではない。普通にささやかながらも暮らしていくことができるように希望しているんです。ただそれだけなのに。」「みんな仮設住宅から(災害復興公営住宅に)来たから知らない人たちばかりだよ。でも仮設のほうがよかったかもなあ、なんか横のつながりがあった気がするよ。ここは外さでなきゃほんとと人っ気ないし、(建設賞を受賞した建物)立派すぎるんだよ。」被災地を歩いていると、領民や高齢者のそんな切実な言葉を耳にする。しかしながら、そんな声に誰もが気を留めないまま、被災地の地図は、都市のまなざしでもって次々と塗り替えられていく。誰も望んでいない巨大な防潮堤、津波の危険を最大限除去すべきであるとする「災害危険区域」の設定、浜の文化を破壊させる県知事肝煎りの水産復興特区の導入—どれをとっても「被災者目線」ではない“立派な”政策ばかりである。(中略)すなわち、災害における「高台移転」、「防潮堤」や「災害危険区域」、そして「原発避難区域の議論は科学的因果関係のもと、いつのまにか被災者の暮らしの目線を通さないまま、生きるか／死ぬかという単線的な生存の議論にすり替わっている。」つまり、「確かに政府の科学的根拠に基づいた視点からすると、あなた方が進めている“復興”は合理的かもしれない。だけど、なんか違うよなあ」といった具合に、依然として被災者の精神的な“おいてけぼり感”のようなものは解消されていないのだ。

そうした“被災者の暮らしの視点”の必要性を踏まえると、ハード面の復興と同等に、被災者が現状の生活に満足できる環境を整える必要があることがわかる。確かに、「満足感」とは物の考え次第だったり、個人によってまちまちであったりする。しかし、上述した、仕事を失い人生に対する根本的な喪失感を抱く、コミュニティが希薄になり、社会的に孤立する、こういった極端な事態は解消されるべき

であろう。どの人たちも一定程度満足できる最大公約数的な「豊かな暮らし」を目指す復興は、いかに被災者の極端な苦痛を取り除けるかにかかっていると思う。

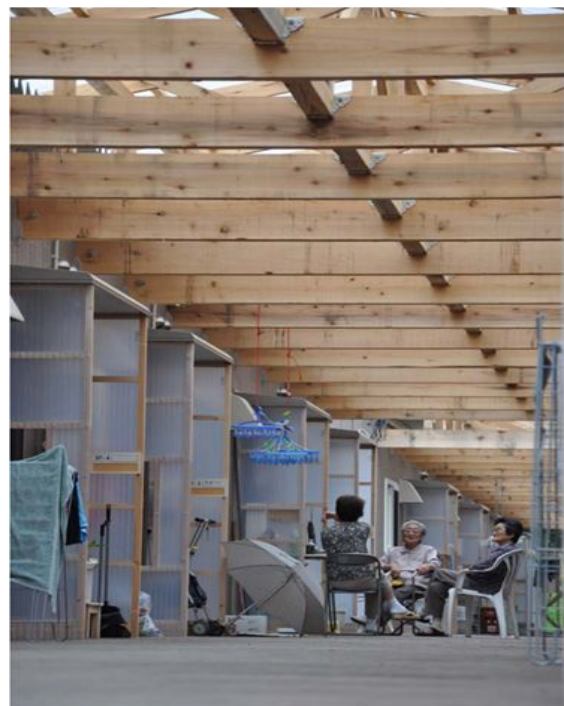
では、現状どういった策が講じられているか。例えば失業の問題について政府は種々の対策を打ち出している。厚生労働省の2016年資料によると、例えば「ハローワークにおいて、求職者のニーズに応じた求人の開拓・確保、職業相談・職業紹介、職業訓練への誘導など、個々の被災された求職者に寄り添い、きめ細かな就職支援」を行った結果、平成23年度から26年度の間には被災3県において約56万件の就職件数実績を出しているそうだ。また、「事業復興型雇用創出事業」という「国や自治体の補助金・融資の対象となっている被災地の中小企業が、ミスマッチ分野等において期間の定めなく被災求職者を雇い入れた場合に人材育成等のための費用を3年間助成」する事業では同時期に同地域において約12万人の雇用を創出しているという。

更に、コミュニティの問題について、個別の自治体の単位で見ると、熱心な対策に取り組んでいる場所も散見される。例えば、2016年更新の「NHK地域づくりナビ『災害復興とつながりづくり』」では、阪神淡路大震災での避難生活において大阪市豊中市で行われた取り組みに倣い、岩手県石巻市で行われている取り組みが取り上げられている。具体的には、食事会を開催し、自力で来られない高齢者の方には弁当を宅配することを通して顔を合わせる、家を周り、ゴミ袋を配るなどしてゴミ出しを支援するとともに、日ごろの生活の不満や不安に耳を傾ける、住んでいる方の得意なことを披露する集会の場を設ける、といったものだ。確かにこうした対策は有用だと考えられる。先に挙げた本でもそこはかたない交流ができることが重要とあったので、定期的に近所の人と顔を合わせる機会をなるべくほとんどの住民が持てることで、充分孤独感の軽減が期待されるだろう。

また、東京大学の高齢社会総合研究機構が構想した「コミュニティケア型仮設住宅団地」なるものが釜石平田地区にできている。それまでの仮設住宅では単調に棟を並べただけで、他者と会う確率が低かったものだが、この新提案では住戸を向かい合わせにした上で、その向かい合う門戸の間にくつろげるデッキスペースを配置することで、自然にコミュニティを形成しようと試みたのだ。



このようにして、コミュニティの希薄化には住民らの努力によって対応が可能な部分はある。ただし、これはあくまでも一部の市町村に限った話であり、全体で見ると依然課題は残ることに注意したい。2018年放送のNHKスペシャルの放送内容を記したHPには「今、被災地では想像を超えた事態が起きている。“終のすみか”のはずの災害公営住宅では、体調を崩し孤立する高齢者が相次ぎ、働き盛りの世代も生計をたてられずに



苦悩を深める。かさ上げした新たな街では、住民が戻らず、使う予定がたたない“空き地”が広がる未来が見え始め、人を呼び込むために新たに税金が投入されている。」とあり、実際に苦境に立たされている方も多いのが実情だ。人口流出が進む中で、どのような形でコミュニティーを確保するかという点においても課題が残る。こうした課題を乗り越えないと真の復興とは言えないと思う。

☆ディスカッションの内容

この文章の「被災者の精神的な課題が解消されない限り復興とは言えない」という価値観には全員同意した上で議論が始まった。

始めに議論したのは「こうした課題に対して国はどれほど責任を負っているのか（＝どれほど積極的に解決に動くべきか）」についてだ。つまり、文章中で紹介したとおり住民らの自主的な取り組みによってある程度解決している以上、住民の自主性に任せる考えもあるのではないかと、ということだ。最終的に、「人口流出や危険区域に指定されて元いた場所に絶対に戻れない人がいるという状況を踏まえると、震災前後でコミュニティーの形が変容するのは不可避であり、高齢者など、精神的・身体的に弱い人々はどうしてもついていけないケースがある。そうした人がいる限り一定の対応する責任はあるのではないかと」という結論に帰着し、「過剰な介入をするのではなく、あくまで“奨励する”レベルに留めるべき」との意見も出た。

次に災害公営住宅での孤立化について、まず「元々同じ地域に住んでいてつながりの強い人達を同じアパートに住ませるといふ工夫」はあるのではないかと意見が出た。しかし、人口の流出や亡くなってしまった方が多い状況を踏まえると、簡単なことには思えない。そういった中では集会所を設置し、イベントを定期的に開催するなど、文章中で紹介したようなちょっとした工夫をすることで充分対応可能という結論に至った。

災害公営住宅に移り住んだ人々は、コミュニティーの変容はあれど、再び「ふるさと」を形成する余地は充分にある。しかし、例えば原発の付近に住んでいて他県に移り住むことを余儀なくされた人々はどうか。そこで挙げたのは原発避難者に対する偏見の問題だ。小学校で深刻ないじめの問題が多く報告されている実情を伝えると、Choateの生徒は非常にショックを受けた様子だった。こうした偏見やいじめの問題への対処について非常に深い議論がなされたが、最後は「単発で短期的な対策に頼り続けるのではなく、長期的かつ構造的な変革が必要だ」という結論に至った。

●あなたはどのように考えますか？

ケース:石巻市仮設住宅供与期限：平成30年度（特定延長対象世帯を除く）

上記の仮設住宅供与期限は当初2011-2013の2年間までの予定でしたが、延長に続く延長の末、今年(2018年)で7年目に突入しました。仮設住宅の8割の住民は既に退去が済んでおり、2点問題が浮き彫りになりました。1点目は退去が完了していない二割の住民の孤独について。これは特に独居男性を指しますが、仮設住宅に未だ住み続けている人は孤独の場合が多く、アルコールに依存するなどの傾向もあります。元の住民がいなくなった上、一人で孤独を紛らわすのが難しいからです。2点目は退去が完了し、復興住宅に引越しを既に済ませた人々のトラブルです。復興住宅は仮設住宅と違い、被災者一人一人の状況が見えにくいという難点があります。人々はこういった問題に対し、どう立ち向かうべきなのでしょう？もし、あなたがこのような状況になった際、あなたはどのように行動するべきでしょうか？復興の期限とは何でしょうか？あなたは何かをもって「復興」と考えますか？

What is “復興 (reconstruction) ” ?

Ryo Sato/ Taishi Nishizawa

Devastating and record-breaking natural disasters deprive people of everything, which is deeply ingrained in the remainder of their lives. I have not actually experienced such incredible loss, but imagining everything — my house, town, books, clothes, and so on — vanishing in a single moment is enough to throw me into despair. The feelings that arise in the wake of natural disasters are beyond any description and imagination.

“復興(*fukko*)”, which signifies “reconstruction”, means to return to the conditions from before the disaster. This would be a terribly painstaking thing. However, restoration must be accomplished and the responsibility of this falls to the government, according to “東日本大震災復興基本法 (Order for Reconstruction in Response to the Great East Japan Earthquake)”. This order states that the reconstruction is carried out “so as to create an economy and society where current and future generations can lead safe and prosperous lives”. Such “safe lives” can be attained by taking steps to limit physical damage caused by disasters. However, in this case, we must interpret that fulfilling “prosperous lives” is a prerequisite for “復興”. Therefore, we must think about what it means to live a “prosperous life”.

Thinking more deeply about the meaning of having a “prosperous life” reveals the ambiguity of the phrase. Was life before the disaster “prosperous” in the first place? Or can you say your life is “prosperous” if you can live in a clean house or eat some good food? It is impossible to reach a universal answer. Thus, I would like to indicate some situations which are considered to be “unprosperous” based on situations introduced by the disaster. Such conditions have been described by various websites, books, and TV program.

For example, loss of work can gravely affect the survivors’ mental health. Occupation does not only ensure one’s livelihood, but also holds relevance in a person’s life. Kurita Yoshiyasu, an associate professor at Niigata University, states that “Gaining money is not the only purpose of working. ... More or less, a person’s occupation reflects or influences his/her perception of life. In this point of view, work has a meaning that transcends merely gaining money. Rather, a person’s work is deeply intertwined with his/her way of life.” Thus, sufferers who have been deprived of their work, which could be a strong motivation for living, must have experienced psychological trauma. In fact, Kanehishi Kiyoshi, a professor at the Tohoku Gakuin University, remarked that “It is reported that the number of people with symptoms of dementia has been increasing since the Tohoku disaster. It can be inferred that for those people, losing their native and familiar place contributed to their mental decline. Actually, in the devastated areas, the elderly survivors often regained their past vitality when they began to garden on the plots of land that used to be their houses. Being spontaneous and self-sufficient has been shown to prevent dementia and sleeping disorders, as opposed to being passive and only receiving help from volunteers.”

Some of the people who have lost confidence, spirit, and purpose also face isolation from the community as they move to public restoration housing. Shiozaki Yoshimitsu, a professor at Ritsumeikan University, describes the problem:

“Kodokushi(孤独死), which means “solitary death,” is to commit suicide or die from disease under any of the following four conditions: 1. Low income, 2. Chronic disease, 3. Social isolation, and/or 4. Deteriorated environment. Why have such deaths been occurring and continue to occur in

makeshift and public restoration housing? We can infer the reason from cases when people who have lost hope because of loss of family, house, possessions, and work turn to substance abuse to cope or simply die alone because they lack the household skills to survive and sustain themselves. However, to address individual cases of *kodokushi*, we must focus on streamlining the transition of the survivors' living environments during the move to makeshift or public restoration housing. ... Small, familiar interactions, such as having a chance encounter and chat with someone in town or exchanging a glance with an acquaintance for no other reason than to confirm their existence, occupy an important part of daily life. We can name these incidences "path-of-flow interactions" or "line-of-sight interactions", such exchanges as greeting one another or making eye contact, which happen through the random overlap of people's path of flow. It is important for people to have interactions by chance in daily life. Beyond mere random events, these interactions are also deeply rooted in the structure of life in a given area, and many people can't live their lives without them. After moving to large-scale or high-rise public restoration housing and losing contact with their familiar society, some people who were previously poor or abusing alcohol became even more isolated and ended up dying in solitude."

Professor Yoshimitsu coined the term "restoration disaster(復興災害)" to describe instances when people would disregard their mental and physical health and finally die. According to his book, the number of solitary deaths in makeshift public restoration housing amounts to 112, and according to the Ministry of Restoration, the number of disaster-related deaths amounted to 3089 by September of 2017.

The physical restoration certainly progressed due to the government's efforts. Thanks to large investments, there has been steady progress in restoring the city's former infrastructure; roads have been rebuilt to eliminate debris and seawalls have been bolstered. According to *"The report on the situation of the reconstruction from the Great East Japan Earthquake"*, issued by the Ministry of Reconstruction in November 2017, "The government, in regards to the *"Basic Policy on Recovery from the Great East Japan Earthquake"* decided that the construction period was to be set until the year of 2020. Since the earthquake, the agency has continued to dedicate much of its time for restoration and reconstruction. As a result of these efforts, restoration of infrastructure closely related to daily life is close to being completed in areas that were most affected by disaster. In addition, the regeneration of industries and livelihoods has steadily progressed. A new phase for reconstruction is commencing." However, it is questionable whether the victims have recovered in the spiritual aspect mentioned earlier. In regards to the difference between the government's reconstruction policy and the need for attention to the victims' mental health, the aforementioned *"The introduction of earthquake disaster prevention - the social concept from the viewpoint of death and life(『震災学入門—死生観からの社会構想』"* makes a clear point:

"It's not like we really desire to live as if we were living in the metropolis. All we really want is to live modestly. That's all we want.'

'Everyone here (public housing for disaster reconstruction) came from different temporary housing, so all of us are strangers. But I wonder if the temporary houses were actually better for us since we had more connections to each other. This place often feels pretty barren. It's probably because the buildings (which were built by the government) are too grandiose.'

Walking around the afflicted areas, these are the earnest words you hear from the civilians. However, without paying any attention to such opinions, the lawmakers in the capital continue to repaint the afflicted areas one by one. Whether it be the towering seawalls that nobody wants, the

setting of the “disaster hazard zone” that supposedly minimizes the danger of tsunamis, or the prefectural governor’s introduction of the “special fishery reconstruction zone” (which only destroys the cultures of the coastlines), they’re all changes that aren’t created from the victims’ perspective, but ones that seem like “good” policies from the government’s perspective. ... In other words, the discussions over “the relocation of the civilian neighborhoods to highlands”, “the sea wall”, “the disaster hazard zone”, and “evacuation areas from nuclear power plants” have all turned to arguments of survival, without taking regard of the victims’ opinions.”

“From the viewpoint based on the scientific evidence from the government, the ‘reconstruction’ being set into motion may be reasonable, but something definitely feels wrong.” These are the opinions of many victims: to this day, the feeling of “being left behind” is yet to be resolved.

Then, what kind of measures are currently being taken for the survivors’ mental health? For example, concerning the problem of unemployment, the government has devised various countermeasures. According to the Ministry of Health, Labor and Welfare’s data from 2016, for example, as a result of conducting “fine-grained employment support at the job-placement office, attracting individual affected job seekers, cultivating and securing recruitment according to job seekers’ needs, and employment consultation and employment introduction,” employment numbers have recovered for about 560,000 from 2006 to 2011 in the three suffered prefectures.

Another project formed from the partnership of local and national governments, the “Business Reconstruction Employment Creation Project,” provides subsidies and loans for the human resource departments of small- to medium-sized companies within the disaster area. These companies hired disaster-affected job applicants indiscriminately, creating approximately 120,000 jobs in the same area and time period.

Furthermore, looking at the issues related to community, there are places where enthusiastic measures are being taken. For example, according to the 2016 edition of the “NHK地域づくりナビ 『災害復興とつながりづくり』 (NHK Regional Disaster Navi “Disaster Recovery and Building Social Connections”), in Ishinomaki City and Iwate Prefecture, some social recovery efforts are being made to imitate the recovery model from Toyonaka City, Osaka after the Great Hanshin-Awaji Earthquake . Specifically, the citizens organized dinner parties, delivered lunch for elderly people who could not retrieve it themselves, made house calls to listen to the people’s everyday anxieties while distributing garbage bags and picking up trash, and set up talent shows for the habitants to show their hobbies. These measures are useful for sure. As the aforementioned book remarked, it is important to have social interactions without special reasons. Thus, the residents’ feelings of loneliness and social isolation can be alleviated by regular face to face interactions with neighbors.

As another action, the “Makeshift Housing for Community Care”, which was devised by the University of Tokyo’s Organization of Synthesized Research of Aging Society, was built in Kamaishi Hirata district. It seemed to be just a monotonous arrangement of the buildings, which lessen the probability of meeting neighbors compared to previous models. However, this new proposal attempted to form a community naturally by placing the dwelling units facing each other and by installing deck space where the habitants can relax in an accessible location.

Discussion topics

- Is the “tenuity of community (such as isolation)” a grave problem that the government has to actively solve?
- Are there other measures to this problem
- As mentioned at the last passage, There are some areas that yet have problem of tinuous community. Including these area, are there some measures to solve this problem in every place?

Discussion results:

The discussion started with the consent to the notion that “*Fukkou* (reconstruction) can’t be fulfilled without overcoming the mental straits that many devastated people face”, which was addressed in the paragraph.

First, we discussed on the responsibility of the government to solve these problem. Considering that there are some cases that the inhabitants are solving the problem through their spontaneous assault, it may be possible to refer the problem to the citizens’ spontaneity. Eventually, we reached the conclusion as following; “Given the fact that the population outflow is present and that people who use to live in the designated dangerous area definitely can’t live at the original place, the transfiguration of the form of the community cannot be avoided. Under that circumstance, some of the mentally and physically people, such as the elderly, can’t possibly adapt to the new community. As far as such people are, the government has responsibility to deal with it to a certain extent.” There was also a statement that the government should not force them to have interchange, but should encourage them to do.

The next issue was about the social isolation in public restoration housings. A proposal that the authority should gather the people who use to live in the same area in the same apartment” However, this doesn’t seem easy because the population keeps outflowing and many people died in many areas. Thus, in order to rebuild a different community in the public restoration housing, the government can deal with the problem by building some gathering space, encouraging them to hold events regularly, and so on. That was the conclusion we came to.

People who live in public restore housing, even though there are transition of the form of community, can rebuild their “hometown”. On the contrary, for example, people who were compelled to move far away due to the atomic-power accident face much more difficulty; prejudice. It is reported that children who moved far away from their hometown often become victim of bullying, which made the Choate students seem awfully shocked. There were deep discussion on the problem of prejudice and bullying, and eventually we concluded that “Not keeping relying on short-term countermeasure, the government must conduct long-term and constructive makeover.”

Translation and interpretation by Ryo Sato, Taishi Nishizawa

Edited by Robert May, William May, Ziyang Lei

What would you do?

When is the limit of restoration? What do you think is “reconstruction?”

未災地への警鐘

代永 雄也

1. 未災地とは

未災地とは、これからの災害が予測されている、未来の被災地のことである。つまり、未だ被害にあっていない土地、そして将来必ず被災地となる土地だ。限定的に考えれば、これは沿岸部や活断層、活火山のある地域のことを示すが、広く考えれば、未災地とは日本全体、ひいては世界全体とも言える。

2. 被災地と未災地の差異

被災地と未災地では、そこに暮らす人々の意識に少なからず差が開いてしまっている。例えば、東京には立川断層などの活断層が確かに存在し、将来首都直下型地震が起こることが予測されており、この事実は東京に暮らす人々に広く知られている。しかし、実際にその事実を深く受け止めている人はかなり少なく、地震とは無縁だと思いながら生活している人が大半であるように見受けられる。実際東京は90年程前に関東大震災で深刻な被害を受けているのにも関わらず、である。また、意識の差異というのは、東日本大震災の実際の被災地でも生じてしまっている。例えば、岩手県では、沿岸部はいまなお癒せぬ甚大な被害を受けたが、盛岡市や花巻市、北上市、世界遺産がある平泉町や一関市は直接的被害は大きくはなかった。このような被害のレベルの違いにより、沿岸部と内陸部では距離にしてわずか40、50kmほどの差で大人、子供それぞれの災害に対する考え方、心情は大きくちがったものとなっている。

3. 未災地への取り組み

・未災地ツアー

災害が起きたとき、人は一度訪れた土地や知人がいるところに支援に入ろうとする。この感情を利用して、災害の予測される地域を訪れてもらい将来の支援者を増やそう、というのが未災地ツアーの目的だ。もちろん、参加者は観光だけでなく、防災の課題と取組を学び、ネットワークを広げる。

・桜の植樹

170kmに及ぶ津波の到達地点に桜を植樹し、後世まで東日本大震災を忘れずに伝え、また植樹活動によって未災地の若者に被災地に関わるきっかけをつくり、防災や減災の意識を高める機会としている。

ディスカッショントピック

- ・未災地の訳語はなにか？
- ・未災地の人々の意識を上げるにはどうすればよいか？
- ・未災地外の人々が未災地にできることとは？
- ・未災地の人々ができることとは？

ディスカッション結果

・未災地の訳語はなにか？

未災地という言葉は、日本で東日本大震災後に生まれた言葉であり、その言葉自身はその意味をよく表現しているので、寿司→「sushi」、味噌→「miso」のように、無理に英語に訳すよりも、日本語そのまま未災地は「misaichi」と表記するのが自然だろう。あるいは無理にでも英語に訳す場合は、「potential disaster area」と訳すのが適切だろう。

・未災地の人々の意識を上げるにはどうすればよいか？

東京都で東京都総務局が「東京防災」という災害に対するハンドブックを都民に配布したように、未災地の各自治体がオリジナルの防災対策マニュアルを作成し、それを広めていくことや、防災イベントを積極的に開催していくことが重要である。

・未災地外の人々が未災地にできることとは？

高知県などで実際に実行されている未災地ツアーなどの、未災地で開かれる防災イベントに参加していくことで未災地とのネットワークを作り上げていくべきだ。また、中国では、あるベンチャー企業が九寨溝地震を発生71秒前に予測し警報を発令することに成功し、被害を抑えられた。この例にならない、災害を予測する技術などを発展させていくことが効果的である。

・未災地の人々がすべきこととは？

自分たちの住む場所に災害が発生した場合どのようなことが起きるのか想像し、その時自分たちがとるべき行動、避難場所などを予め決めておくことが大切である。また、学校などの施設で実践的な訓練を定期的に施行すること、国家が災害に対する安定したシステムを整えておくことなどが重要だ。

●自分は大丈夫、と思っていないか？

東日本大震災や西日本豪雨、北海道地震など、災害は連続して絶えず襲って来ます。これは日本に限ったことではありません。米国のハリケーンやアラビア半島のサイクロン、世界中どこにいても、災害は常に我々につきまとして来ます。「自分だけは大丈夫。」正常性バイアスの典型です。いざ災害が起こった際の備えはできていますか？あなたは災害が起こった際、今まで得た知識や知見、教訓を総動員して自分だけではなく、家族、そして周りの人々を助け、導くことが出来ますか？真価が問われるのは備えだけではなく、真に被災をした際の対応力なのです。

Warning for Misaichi

Yuya Yonaga

1. What is misaichi?

The definition of *misaichi* is “an area predicted to be hit by a disaster in the near future.” This word was invented after the Great East Japan Earthquake. Generally, we consider *misaichi* as coastal areas, and regions where active faults or active volcanoes are located. However, interestingly, some consider it as the entirety of Japan, or the entire world.

2. The differences between disaster area and misaichi

Considerable differences exist between the terms disaster area and misaichi. For example, there is an active fault called ‘Tachikawa Dansou’ in west of Tokyo, and it is predicted to trigger the capital epicentral earthquake in the future. Even though this fact is well known to the residents of Tokyo Prefecture, and also Tokyo has already been hit by a powerful earthquake called ‘Kanto Daishinsai’ about 90 years ago, most of people think little of the fact and it seems that they think of themselves as immune to possible disastrous earthquakes. Besides, the difference also exists even in actual disaster areas. For instance, in Iwate Prefecture, on the one hand coastal areas were seriously damaged, but on the other hand the damage was of little significance in the inland areas. Because of such difference of damage, the views and feelings on disasters of people in the coastal areas differ widely from those of people in the inland areas, although the distance between them is only 40km.

3. Activities for misaichi

• Misaichi Tour

When a disaster happens, people tend to support places where they have been to, and where their acquaintances live in. The purpose of this tour is to use this tendency to increase the number of future supporters. Of course, the participants not only do sightseeing but also study issues and activities of disaster preparedness.

• Planting Cherry Trees

Plant cherry trees along tsunami reaching points for 170km and pass down the threat of the Great East Japan Earthquake. Besides, this activity make an opportunity for young people in *misaichi* to be concerned with a disaster area and improve their attitude toward disaster preparedness.

Discussion Topics

- What is the appropriate translation for ‘*misaichi*’?
- What activities are effective to improve attitude of people in *misaichi*?
- What can people outside *misaichi* do for people in *misaichi*?
- What can people in *misaichi* do?

Discussion Results

Since the term *misaichi* is a relatively new term and invented in the context of the tohoku earthquake, it doesn't even have an entry in the dictionary. Thus, we do not see the need to come up with a similar term in English. However, we can roughly translate *misaichi* to "high disaster risk area."

Following Tokyo, whose General Affairs Bureau distributed a disaster manual Tokyo Disaster Prevention, other local governments should also take part in similar practices specifically designed for their region. Also, they should actively hold events and simulations that allow people to experience the earthquake and help with increasing their preparedness.

In Kochi prefecture, they have been conducting "misaichi tours," which allows encourages connections and awareness of people who may be outside of the high risk areas.

In terms of aid for those living in *misaichi*, they should actively imagine and decide clearly on how they should act and the best evacuation route beforehand so that they could act calmly, decisively and efficiently during a disaster. Federal aid from the national government in addition to initiatives be local governments would be more effective overall at improving awareness and preparedness than other external sources, such as people outside of the *misaichi*.

Translation by Yuya Yonaga

Edited by Robert May, William May, Ziyang Lei

[Aren't you assuming that you are going to be alright?](#)

Disasters constantly strike this archipelago nation: the Great East Japan Earthquake, the Torrential Rain in Westside Japan, and the Hokkaido Earthquake. Of course, disasters also strike worldwide: Hurricanes in the United States, Cyclones in the Arabian Peninsula, etc. The feeling, "I am going to be okay" is a typical example of a normalcy bias. Are you truly prepared for disasters? Can you save not only yourself, but your family, friends, and neighbors by using the knowledge you have? The true ability to survive not only lies in the preparation, but also in how you react to certain events during the disaster.

石巻NEWSéeボランティア活動（一部）

Some of the Ishinomaki NEWS'ee Volunteer Service Work We've Done

壁新聞の英訳を行いました。We've translated the six wall newspapers.



角川SSC新書

「6枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録」 石巻日日新聞社編より抜粋

Excerpt from Kadokawa SSC Books, "The Six Wall Newspapers: Records of the Seven Days After the Great East Japan Earthquake by Ishinomaki Daily Newspaper," Ishinomaki Daily Newspaper Section

1日目

Ishinomaki Daily Newspaper [edition]

March 12th, 2011**The Biggest Earthquake and Devastating Tsunami in Japan*****-The Great East Japan Earthquake, M8.8/ Kadonowaki District and Minamihama District are devastated-***

At 2:46 pm on March 11, the earthquake struck the Sanriku coast.

The earthquake registered at a magnitude of 8.8 on the Richter scale; it was the most powerful quake registered since seismic observations began in the Meiji period, around the late 1800s to early 1900s.

In the Ishinomaki District, the seismic intensity measured greater than 6 on the Japanese seismic scale, 7 being the highest. Shortly after that, a series of tsunamis hit the northeastern coast of Japan and submerged many coastal areas of the Tohoku district. Many people caught in the tsunami are still missing, caught up in the tsunami, and the number of victims is estimated to further increase.

The tragic sight of cars floating or scattered on streets was left everywhere.

[Information of major damage as of March 12th]

According to the Ishinomaki Center for Disaster Management Agency:

11th16:00 The seven-story Ishinomaki City Hall building collapsed. Also, all of Ayakawa beach was devastated.

17:50 Kadonowaki Elementary School burned down, Kitamura Elementary School is at risk of collapse.

19:20 The Air Self-Defense Force at the Matsushima base could not dispatch rescue operations because the runway was submerged in water.

20:10 Tenno Bridge collapsed.

12th10:35 Naikai Bridge collapsed.

[Information on fires]

From March 11th to 12th, there were consecutive fires around the Hiyorigaoka and Central/Kajita districts.

* Ishinomaki City has put out a request for blankets to be brought to the City Hall*

Please make sure to stay updated with accurate information!

Translated by Junichiro Furuno (Kaisei High School)

Edited by Robert May, Will May (Choate Rosemary Hall)

2日目

Ishinomaki Daily Newspaper

March 13th, 2011

Rescue Teams Arrived from Across the Country

Extent of damage gradually becoming clear

The Great Tohoku-Kanto Earthquake

<Ishinomaki Area> Minamihama and Kadonowaki towns destroyed,
Watanoha District devastated

<Higashi-Matsushima Area>

Tsunami reached the Akai District, inundation above floor level, water reaching waist-deep on the morning of the 13th. According to local residents, Omagari District has been devastated.

Rescue teams such as the Self-Defense Force and fire brigades, even those from foreign countries, have arrived at the scene. At present, they are conducting rescue operations and providing refugees with water at shelters. The city government, which stocked little food, is appealing to city residents to contribute food and other necessities. According to the city, power was restored in the Hebita District on the 13th. The Ishinomaki City nursery school, kindergarten, and elementary and junior high schools will be closed until the 15th. The announcement of student application results has been postponed until the 22nd.

Do not be misled by inaccurate information!

Translation by Tetsu Sakamoto (Kaisei High School)

Edited by Robert May, Will May (Choate Rosemary Hall)

3日目

Ishinomaki Daily News <edition>

March 14th, 2011

Resources and supplies delivered from all over the country

Ishinomaki District is receiving water, food and blankets from large supermarkets and stores, and will later receive additional supplies from various local governments. Ishinomaki is collecting those supplies in the general athletic playground and then distributing them to individual shelters. In addition, the water tanker trucks and drinkable water are being sent to the district from various prefectures and communities. **Beware of afterquakes.**

On March 13th, Ishinomaki has requested shelter tents (1000 people available) from the central government. On the morning of the 14th, the Azuma region's vice-minister visited Ishinomaki and inspected the damaged locations and shelters with district mayors.

Strong quakes have occurred in various places on the 14th. One earthquake that struck the coast of Ibaraki registered magnitude 6.5 on the Richter scale. The meteorological agency is paying close attention following the quake, for there is still a possibility of strong aftershocks and tidal waves.

[Higashi-Matsushima District]

The Higashi-Matsushima district has established 79 shelters, and the total seating capacity is approximately 13,705. Almost 1000 people are missing.

[Onagawa City]

Onagawa City was hit by an enormous tidal wave over 10 meters high; most locations have been devastated, and only a handful of public buildings remain. The self-defense forces and other organizations have started rescue operations.

Confirmation of safety

Each shelter is organizing lists of refugees and posting personal messages.

Translation/Interpretation by Issin Yunoki (Kaisei High School)

Edited by Robert May, Will May (Choate Rosemary Hall)

Ishinomaki Daily Newspaper

March 15th,2011

To date , 2800 houses have been lost. According to the Ishinomaki Center for Disaster Countermeasures, the number of evacuees in Ishinomaki have reached 38,633. Evacuees are currently spread throughout the 106 evacuation shelters. Many evacuees were separated from their families in the disaster. Some of the evacuation shelters have made lists of evacuees to help people search for their family members.

- Volunteer Center opens

The Ishinomaki Center for Disaster Countermeasures set up a volunteer center at the University of Ishinomaki.

- Radio Channel

A special program for evacuees will be broadcasted from 8:00 to 19:00. Check Radio Ishinomaki(FM76.4)!

- Elderly Care

Volunteers needed at evacuation sites to assist the elderly.

Volunteers are needed at the following locations:

Sumiyoshi Elementary School, Nakazato Elementary School,
Minato Elementary School, Watanabe Elementary School,
Shikazuma Elementary School, Kama Elementary School,
Okaido Elementary School, Kadonowaki Junior High,
Sumiyoshi Junior High, Aoba Junior High,
Ishinomaki Junior High, Kobunkan High School

- Free Food

Evacuees can get free meals at restaurants in Ishinomaki from the 12th.

Translation/Interpretation by Shotaro Hiranuma (Kaisei High School)

Edited by Robert May, Will May, (Choate Rosemary Hall) and Ryo Kuno (Kaisei High School)

Ishinomaki Daily Newspaper

March 16th, 2011

“We shall endure this hardship together”

An outpour of support from all over the country

According to the Ishinomaki Center for Disaster Countermeasures, the number of evacuees in Ishinomaki City has reached 39,854. As of now, 425 people are confirmed dead, and 1,693 people are still missing (the count in Ogachi City and Kanan City is still unknown). The earthquake and tsunami have rendered the Hiyori Bridge impassable.

The Uchiumi Bridge is open for traffic. The Great Ishinomaki Bridge, Kaihoku Bridge, and Magiyama Tunnel are all clear. Nursery schools, kindergartens, elementary, and middle schools in town are all to be closed until the 15th, with the exception of some schools opening on the 18th. Supermarkets like Yokado Akabono branch, ヨークベニマル蛇田店, and Rock Town Yamato are partially open for business. As for roads, Minamihamacho is closed due to debris and Teizan, Minaminakasato, and Kaihoku are all still flooded. On the other hand, flood waters in areas around Sangenjaya and the city hall are gradually receding, and more bullet trains (shinkansen) are running. However, due to the large amount of debris still scattered across the roads, the Center for Disaster Countermeasures has cautioned citizens to “*Stay in (your) homes at night.*”


Starting with the evacuation centers and public facilities, electricity is slowly coming back; however, it seems that it will be some time before running water is back up.

A few convenience stores are expected to reopen once power has been restored. In the evacuation centers, viruses like the flu are spreading rampantly among the evacuees. Thus, it is important for people to remember to always cover their mouths when coughing and be conscious of hygiene. Restoration of the city has already begun, with support coming from all corners of the country. Multitudes of messages urging the citizens of Ishinomaki to stick together and continue persevering have been received in the last couple days.

Five thousand still missing in Onagawa City

Even in Onagawa, one of the most severely damaged areas, about six thousand people have found shelter in evacuation centers: the auditorium, town hospital, and elementary schools (11 in total). Houses located in the Asahigaoka area sustained only minor damage thanks to their high elevation.

Helicopters, rescue teams, and National Guard troops have been sent from nearby prefectures like Wakayama and Niigata, and they have set up their main base at the Onagawa



dai-ichi middle school. They have mainly helped clean up the debris as well as serve food to evacuees. Some among the evacuees had to climb up and stay on their houses' roofs, as their house foundations were swept away by the tsunami. The evacuees were miraculously found and rescued by ships. However, five thousand people are still missing.

Translation/Interpretation by Taishi Nishizawa (Kaisei High School)

Edited by Robert May, Will May (Choate Rosemary Hall)

6日目

Ishinomaki Daily Newspaper

March 17th, 2011

Light Spreads Throughout the City Over 10,000 Houses Have Restored Electricity


Six days have passed since the Great East Japan Earthquake struck Japan. At Ishinomaki, the area that was devastated by the earthquake, leaving more than 45,000 people forced to move into evacuation centers. People wish for the quick restoration of the city and the confirmation of people's safety. At Tokyo Electric Power Co. office, restoration efforts started on March 15th. Due to these efforts, the number of houses with proper electricity has increased from 3,648 to 11,124. Work vehicles and electricians from all over Japan have come and gradually, the city has been lighting up with electricity. According to Tokyo Electric Power Co., the power has been restored to the city hall of Ishinomaki, the Ishinomaki City gymnasium, three hospitals (the Red Cross of Ishinomaki, Ishinomaki Royal and Saito Hospital,) Yamashita Elementary School, three junior high schools (Kadonowaki, Ishinomaki, Aoba Jaden), two high schools (Eastern Ishinomaki, and Kobunkan), and four water purification plants. Also, depending on the conditions of the power lines, electricity has been successfully restored in some nearby areas.

As of now (March 17th), at the Eastern Prefectural Office for Health and Public Welfare, medical aid is being provided to three parts of the city. Minor injuries are being treated at the Jadachu shelter and the Senshu University Shelter, while major injuries are being treated at the Ishinomaki Hospital. For those who have run out of medicine for chronic diseases, if you could kindly bring your medical records to the pharmacy nearby, prescriptions will be handed out that will last for a few days.

We See Hope!

Electricity Has Finally Reached the Shelters

In some areas of Higashi-Matsubara City, restoring electricity has begun. Even though power restoration will be confined to areas near the disaster response



centers (ex. the city hall, shelters) for now, eventually it will be restored to a much wider range of the city.

A 59-year-old woman who was evacuated to the Yahon Daiichi Junior High School expressed her feelings of hope for the restoration process: "When we saw the city light up, we were all delighted and clapped. Because of this, we believe that we now see hope."

The Board of Education has been discussing the schedule for the graduation ceremony and the classes that will be held from now on. Tamio Kimura, chair of the Board of Education, stated, "Even if there are evacuees living in the school, we still want the classes to restart by April 11th."

The Japanese Ground Self-Defense Force has already started the infrastructure restoration process. In the Akai and Naruse wards, rescue operations have been carried out and destroyed roads have been removed. Since March 16th, tanker trucks have been delivering water to evacuation centers such as Rocktown Yamoto, Japan Railways Yamoto Station, Omagari Elementary School, *etc.*

Translation/Interpretation by Ryotaro Homma (Kaisei High School)

Edited by Robert May, Will May, (Choate Rosemary Hall) and Ryo Kuno(Kaisei High School)

石巻の活動・ディスカッションを振り返って



微 力

久野 凌

毎週のように襲ってくる台風を心配しながらプログラム初日を迎えた朝、私はChoate生をホテルに迎えに行くべく、JR王子駅の北口で待っていた。早朝5:50分。後輩は現れない。「こりゃあ寝坊だな。」と呟きつつ彼の携帯や家に電話を掛ける。寝起きで受話器に喋りかけている彼の声を聞くと少し安心した。集合の東京駅ではなく彼の最寄りの近くの大宮駅から新幹線に乗車するよう指示をし、なんとか欠員を出すことなくプログラムはスタートを切った（が、正直焦った。心臓に悪いので西澤くんには次回開催時、全員の家の電話番号をメモしておくことをオススメする）。

私にとっては二度目の石巻訪問であったが、再び南浜・門脇地区の復興記念公園の整備中の広範な平原をみると、そこが震災前に1,885世帯、4,525人が暮らす住宅地だったとはやはり想像し難かった。海岸線に沿って整備された7.2Mの防潮堤の圧迫されるような高さはそれ以上だった津波の高さの恐ろしさを実感させた。防波堤の向こうには穏やかな美しい海がひろがっているのだろう。磯の香りが心地よい風に乗って吹いているのだろう。震災跡地は幾度見ても胸に迫るものがあった。

雄勝ローズファクトリーや石巻ニューゼでのボランティア活動は皆楽しく、かつ真剣にやっていた良かったと思う。少しでもお役に立てれば幸いである。げんき市場の海鮮丼は変わらず美味しかった。

アメリカ、中国、はたまた福岡など色んなところから来てくれたChoate生には感謝をしてもきれない。ディスカッションやご飯など、すべてがとても有意義だったと感じている。

池上彰が言っていた。「人間は微力ではあるが無力ではない」と。私一人にできることは微々たるものかもしれない。だが、この活動はぜひ、灯火のように後輩たちに託していきたいと思う。

Not Powerless

Ryo Kuno

Being concerned of the typhoons, it was the first day of the exchange program. I was waiting in front of the JR Oji Station North Exit. 5:50 am. My *kohai* still doesn't arrive. *Ugh he's definitely asleep*. Muttering, I call his phone, and then his home. Hearing his drowsy voice from the speaker, I got a little relieved. Giving him directions to ride the train from Omiya, a station closer to his house, instead of Tokyo, I rode the train, finding out that the program had already made its start.

It was my second time at Ishinomaki, but it was still very hard to imagine from the current Minamihama and Kadowaki Districts that that place was once man's land, that had over than 1,800 families, and 4,500 people living. Overwhelmed by the 23.6 foot tide breakers, I imagined the quiet sea, on the other side of the enormous wall. There also maybe a soothing breeze with the scent of the coast. Every time I came to the damaged areas, my heart filled up with a thousand emotions like this.

When doing volunteer work at Ogatsu Rose Factory Garden and Ishinomaki NEW'See, I was happy seeing everyone having fun but seriously working. I hope the work helped those places. The Ishinomaki Genki Market was the same, serving great meals such as sushi bowls and ramen.

I can't thank the Choate students enough for coming from all places, from the U.S. to China, and also from Fukuoka. I thought every activity we did was meaningful, including the discussions and the meals we had together.

Akira Ikegami, a famous Japanese journalist once said: Humans are indeed limited in ability. However, they are not at all powerless. I sincerely hope that this program continues, just like the Olympic torch, for long.



七年の歳月を経て...今までと、そしてこれから

西澤大志

Kaisei-Choate石巻プログラムが終わり、はや数週間経ちました。未だに余韻に浸っている現在ではありますが、少し今回の合宿について振り返ってみたいと思います。今年のESSの合宿は、アメリカのChoate Rosemary Hallという名門ボーディングスクールからわざわざ来て下さった4名の学生と開成生との合同合宿という形で行われました。最初の数日間は実際石巻でのボランティア活動に携わり、残りの日数は東京でのディスカッションという形で遂行されました。その結果、今年の合宿では幾多もの大きな成果をあげることができたと思います。そう僕が思う主な理由は、今回の合宿には大きく1つの特別な意義があり、それを実現できたからです。我々の活動の趣旨の一つは、ボランティアを通じて石巻コミュニティに貢献するというものですが、それは合宿全体を成功に導いた多くの要素の一部に過ぎません。帰京後、開成の教室で議論に費やした時間は単に防災についての理解を深めただけではなく、我々がボランティアとしていかなる方法で貢献することができるかについても熟慮する機会となりました。アメリカの高校生と論議することによって、ときには文化や教育の違いについての気づきを与えてくれることもありました。そしてときには議論が白熱し、時間が足りなくなる場面もありました。

石巻では、石巻NEWS'eeの方々や、雄勝地方でガーデニングを震災以来続けて来られた方や、復興まちづくり情報交流館の方など、多くの方々から刺激を与えられました。ボランティアとしてお邪魔した自分自身が、石巻の市民の復興にかかる想いの強さに圧倒されるなか、真の石巻の美しさを経験することができたという思いが胸に去来します。

日常会話からボランティア活動まで全てが英語で行われたなか、ESS部の後輩たちはみな、臆することなく積極的に取り組んでくれ、とてもありがたいと同時に誇りに思います。今年から部長として務めさせていただく身としても心強い限りです。もちろん、活動中や活動後に少なからず改善点は挙げられましたが、それらが来年以降への原動力になると信じています。

Discovering the 'Genki' in Ishinomaki and beyond

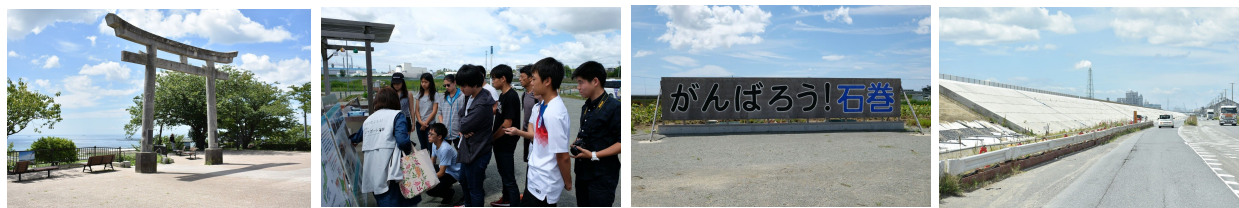
Taishi Nishizawa

This Kaisei-Choate Ishinomaki Program was an experience that I will likely never forget. There is one particular reason why this program was such a memorable one for all of us, including myself. Though the main

goal for this program was to contribute to the Ishinomaki community through volunteer work, that was only a part of the many pieces that played into the week's success. The numerous hours that we spent on discussion after the volunteer work are what helped deepen our understanding of disaster prevention and what we can contribute as volunteers. Through a round table discussion oriented to reflect viewpoints from both schools, we were each able to exchange distinctive opinions and knowledge in a unique way that would be hard to accomplish normally. In certain topics, we encountered cultural differences and how other international communities can learn from the aftermath following the Tohoku earthquake. Most of the times, we found ourselves running out of time because our discussions were so heated up.

When we visited Ishinomaki and actually met the residents that have been living there since the disaster, I believe that we all felt a certain energy about the place. Genki, which roughly translates to 'spirited,' is a word that would best describe the residents of Ishinomaki. The peoples' strong desire -to recreate a city that would not only recover, but become an even better place than before the Tohoku earthquake- was something that echoed throughout the whole city. Where some of us expected to feel dejected, we were instead rejuvenated by the amount of 'genki' and resilience that made it such a beautiful city. I really felt that although we came as volunteers ready to give something to the community, we were overwhelmed by the amount of positive influence we received from residents of Ishinomaki.

I am deeply thankful to the four Choate Rosemary Hall students who decided to come all the way to Japan to help out. And to my fellow Kaisei students, I am proud of the amount of work and experience that we were able to put in. As for our leader of the ESS club, Ryo Kuno, I am extremely grateful for not only the unbelievable amount of work he has put in to make this program a success, but also for his unrelenting enthusiasm throughout the entirety of the program. It would be a lie to say that this program didn't have some improvements to be made. However, that is what makes me even more propelled to start preparing for our next journey as a club. I cannot be more excited for what's to come next summer!



東日本大震災への再理解

代永 雄也

東日本大震災当時、僕自身は東京におり、せいぜい下校が遅くなった程度の被害しか受けなかった。一方、祖母の家は福島県福島市にあり、地震で屋根の瓦が落ち、塀は崩れ建物にひびが入った。さらに、盆地であり放射能による被害が大きく、今なお続いている。これにより、僕は東日本大震災を身近に感じていたが、祖母の家は内陸部なので津波とは無縁だった。今回、放射能の被害は少なかったが津波の被害の甚大だった石巻を訪れ、被災者の方々の話を聞き資料館を見学したことで、また別の視点から東日本大震災を捉えることが出来た。また、東京に戻りディベートでチョート生の意見を聞くことで、東日本大震災を経験しなかった人々、そもそも地震とはほとんど縁のない外国の人々の考えを知ることが出来、東日本大震災への理解を深める貴重な経験となった。

Re-understanding of the Great East Japan Earthquake

Yuya Yonaga

At the time of the Great East Japan Earthquake, I was in Tokyo and did not so affected. The only effect was that I had to go home late. On the other hand, my grandmother's house was in Fukushima city, so tiles fell off the roof, the stone wall crumbled and the house cracked by the earthquake. Furthermore, since the area was a basin, radioactive contamination was serious and it still last. Therefore, I felt the earthquake close to me. However, since Fukushima city was an inland city, tsunami did not affect. On this program, I visited Ishinomaki city, where radioactive contamination was not serious and tsunami damaged seriously, museums and listened to stories from disaster victims. This experience enabled me to grasp the earthquake from other point of view. Besides, I could know opinions of foreign people to whom earthquakes and tsunami are almost irrelevant. It was a really valuable experience to deepen understanding of the Great East Japan Earthquake.



災害について学んで

白石 航太郎

今回ESSの活動として2泊3日の石巻視察、また災害に関するリサーチ(自分の場合は主に西日本豪雨について)や災害について考えるディスカッションなどを行い、思ったことは主に2つある。1つ目は災害の対策に十分という言葉は存在しないということである。これは石巻で津波の当時の状態について聞いた、その他の災害ボランティアなどについての記事を読んでいる際に感じたことであるが、自然の脅威は予測不可能であるし、復興ボランティアはほとんどの被災地において足りていない。このようなことを知れたのは自分の中で良い経験となった。そして次に挙げたいのが、災害について知ることの大切さである。最初に挙げたようなことも含めて、災害への1番の対策はそれを知ることであると今回被災地の方々に話を聞いて痛感させられた。

自分たちができることはあまり多くはないかも知れないが、今回の体験をできるだけ多くの人にシェアし、これから生きて行く上で災害についての意識を常に忘れないよう暮らしていきたい。

Learning about disasters

Kotaro Shiraishi

As an activity of ESS, I visited Ishinomaki for 3 days, did research on disasters (mainly about Western Japan torrential rain) and had a discussion about disaster. And I felt two things deeply through our activities.

First of all, there is no word "ENOUGH" for measures against disasters. This is what I felt while listening to the story about situation of the tsunami and reading articles about disaster volunteers. The threat of nature is unpredictable and the volunteers are usually not enough in damaged areas. It was a good experience for me to learn about such things.

And the next thing I want to mention is the importance of knowing about disasters.

When I listened to the story of the people in the disaster area, I noticed that the most important and easy way to prepare for the disaster is to know about the disaster because we can do nothing without any idea of disasters.

There may not be much things that we can do now, but I would like to share this experience with as many people as possible and I want to live with the awareness of disasters.



雑

柚木 一心

今回実際に被災地に向かって改めて過去と現状を知り、文字で読んだりニュースで見たりした知識なんかとは比べ物にならないショックを受けた。崩壊した校舎やいまだに復興の進まない荒地をみると、自然災害の恐怖の一端を思い知らされ背筋が凍るようであった。特に亡くなった方々に関する話を聞くと、本当に言葉を失うくらいの衝撃を受けた。自然災害が如何に絶望をもたらすかひしひしと感じられた、感慨深い合宿であった。

Choate生と一週間を共に過ごしたことで、単に英語を鍛えられたというよりは文化の違いや互いの様々な体験・知識を共有できてとても有意義な時間を過ごせたと感じ嬉しく思っている。

是非ともこのような合宿を続けて行き、日本で起きた出来事についてより深く知っていけたらこの上なく幸いである。

Isshin Yunoki

We had a precious opportunity to actually visit Tohoku and observe the devastated area. The situation of damage was literally beyond my imagination. That perception is unable to gain without visiting actual places, and I lost my words feeling so anxious and depressed. The sight of collapsed school buildings and untreated wasteland gave me enormous shock. It was a meaningful trip to learn what happened in Japan.

During a week with Choate students, I could learn various experience and knowledge they gained in foreign places. It is my pleasure that I could have such a great time with my mates, and I hope we could continuously hold the exchange program and study deeply about Japan.

有意義な1週間を振り返って

佐藤 遼

非常に濃密な一週間を過ごした。まず、あまり深く考えるきっかけをこれまで持てなかった東日本大震災と向き合い、色々と思いを馳せ、巡らせることができたのも、このプログラムのおかげだ。事前課題で「復興とは」という抽象的で多少取り掛かりづらいテーマを与えられ、復興の状況について勉強す

る機会を得られただけでなく、それを通じて得た字面だけの情報を、実際に現地に行くことで具体的なイメージと生々しさを伴って確認することができたのも大きかった。

Choate生との新鮮で楽しい交流も忘れることはできないだろう。宿で夜恋バナをしたり、一緒にクレープを食べたり、夜の田端台公園でバレーボールに興じたりしたのは本当に楽しかった。

加えて、英語の技能という観点でも実りのあるものだった。一日中翻訳をする、事前課題も自分で英語の文章を書くというのは、サマースクールの選考にエッセイで落とされた僕にはぴったりの機会だった。また、外国人と英語で議論をするのも、色々な気付きを与えてくれた。また、先に触れた英語での恋バナなどで特に、向こうの人のフランクな生の英語に晒され続けるのも、そういう口語的な英語にも関心を持つ僕に価値ある経験だった。

このような濃密な機会を設けるために長い間力を尽くしてくださった、久野先輩をはじめとする方々に感謝の気持ちを申し上げて、この文章を締めようと思います。

Looking back on the fruitful week I've experienced

Ryo Sato

I have spent so dense a week. First of all, I was able to reflect upon the East Japan great earthquake, which I hadn't try thinking deeply before then, thanks to this program. Working on the prior essay writing on the topic of "The definition of reconstruction" was quite demanding because what I had to think of was abstract, and little vague. However, I could acquire basic and general knowledge about the disaster and the restoration from it through working on it, and also observe the actual state of the devastated area.

The fresh and enjoyable interaction with Choate students was an another unforgettable thing. It was really fun "spilling teas" at night in the hotel, eating crepes together, or playing volleyball at the dark Tabata Park in the evening.

In addition, it was fruitful in terms of English skills. Doing English translation all day, and writing essay in English was a felicitous opportunity for me, who was qualified in the essay test for a summer school in Choate. Also, discussing with foreign students in English also gave me various awareness. Also, binge exposed to the frank English of the overseas teenagers was also a precious experience for me.

I'd like to express my deepest thanks to Kuno *Senpai* and others, who had striven to make this opportunity.



プログラムの感想

熊谷 勇輝

東北へのボランティア自体は一昨年に行ったことがあったのですが、特に今回のボランティアは非常に有意義なものであったと確信しています。特に最も印象的だったのは、初日の大川小学校についての様々な視点から現地を眺めることができたことでした。ボランティアに行く前は、たとえば大川小学校に関連する裁判沙汰を見ていて「遺族のやりきれなさをぶつけているのでは」と少し醒めた目線で眺めてしまっていたのですが、きちんと事情を知った上で見てみるとやはり双方ともに事情があったうえでの行動なのだということに気づいて認識が非常に改まりました。また、Choate生との交流も非常に面白いものでした。彼らの視点はやはり我々とは若干毛色を違えていながらも本質を突いた議論を行うので、互いに刺激的な日程を送れたと思います。最後の方は風邪や合宿などで参加できませんでしたが、私としては非常に記憶に残る日程でした。各位非常にありがとうございます。

Comment on This Program

Yuki Kumagae

This program was so meaningful. The Choate students were very wise. I really enjoyed it. I would like to appreciate to all the supports done to this program.



蘇家琪/Kaki Su

退屈な卒業式の予行練習から家に帰り、大好きなカステラを食べながらソファで寝そべっていた小5の、なんの変哲も無いある日。そんな日常を破ったのは、何気なく付けたテレビに映ったSFのような信じられない光景でした。

水に飲まれていく街、車、人、建物、看板、道路。

ただただ呆然と見つめることしかできませんでした。同じ国で起こっているとはとても思えなかったのを、今も覚えています。

あれから7年。そんなテレビでしか見たことのない場所やっと初めて立つことが出来、自分の中でやっと何かが繋がった気がしました。いくらテレビで見ても、いくら体験談を人づてで聞いても、いくら写真を見ても、実際に行ってみないと感じられないものがたくさんありました。それは海岸線付近の寂しい匂いだったり、被災者の方々がふとした時に見せる複雑な眼差しだったり、大川小学校の各所にぽつぽつと供えられた花束だったり、様々な形を取りながら私たちに語りかけているような気がしました。

チョート生と開成生が合同で行なったディスカッションでは、石巻で見たことや被災地の課題について様々な観点から討論し、それぞれ見識を深められたと思います。私自身、アメリカに留学しながら3.11を日本で経験した身として比較的客観的な独自の視点を持っていたと自覚していましたが、それでも自分と全く異なる見方に考えさせられることが多々ありました。こうして多様な意見をぶつけ合い、お互いを尊重しつつ、時には批判的に他人の意見に疑問を持ち、常により良いものを追求し続けていくことは、まだ柔軟な高校生だからこそできるのだと思います。

ディスカッションの管理と準備をしていた身として、最初は2校の生徒間の言語の壁をととても心配していましたが、それが感じられないほどスムーズに進められたのは、日米トップ校の優秀な生徒たちならでもでした。また来年も開成と協力して、似たようなプログラムを実施できればいいなと思います。

蘇家琪/Kaki Su

One day towards the end of my fifth grade year, I came home from school, and I was snacking and lying lazily on the sofa as usual. It was just like any other normal day—until I turned on the TV that showed a scene that almost felt like a science fiction movie.

I still remember so clearly how I was just staring at the town, cars, people, buildings, signs, roads, and everything being swallowed into the black, malicious waves.

I couldn't believe that it was happening in the same country.

7 years have passed since then, and I visited that very site for the first time. I felt like something finally clicked. No matter how much news I saw on the television, how many stories I heard, how many photos I saw, there was something that I could feel only through actually being in the devastated areas. Maybe it was the lonely smell by the sea shore, or the complex expression on the local people's face that I observed occasionally, or the flowers that people left at the Okawa elementary school...

During the discussions by Choate and Kaisei students, I think we each all had much to learn through talking about what we saw in Ishinomaki and the issues surrounding the earthquake. I thought that I had a rather uniquely objective perspective as someone who studies abroad currently yet was in Japan during the earthquake. However, I faced many opinions that made me think deeper and challenge my original ideas. Respecting yet being critical about each others' opinions in the hopes of creating something better might be something only possible for us, the younger generation, with more flexible minds.

As I was organizing and preparing the discussion, I was worried about the language barriers between the two group of students. But the discussion went much more smoothly than I thought. It was as if the barrier did not exist at all, and I think that is mainly because we are from the best schools in Japan and the U.S. I am very grateful that we were all able to take part in such an exceptional and eye-opening opportunity. I hope that we could collaborate with Kaisei next year again for more people to experience what we all did.



Robert May

The first service exchange program between Choate and Kaisei this past summer was an amazingly eye-opening experience for me. Though the Tohoku earthquake and tsunami are now a memory of more than seven years past, the devastating effects of those events maintain a persisting presence, especially in Ishinomaki. Every interactive or informational session that we participated in was incredibly immersive, from the firsthand account delivered by a woman who experienced and survived the disaster, to viewing original copies of the handwritten newspapers distributed by Ishinomaki Newsee in the wake of the tsunami, to visiting the ravaged shell of Okawa Elementary School. For me, the most impactful part of the trip was visiting the coastal areas of Ishinomaki that were struck by the full force of the tsunami and then comparing that empty, grassy expanse with a virtual reality experience that simulated what the coastal area was like just before and just after the tsunami made landfall. Immersing myself in the before and after landscapes generated through VR gave me a glimpse as to how the survivors must have felt to see their homes in ruins, and the experience reinforced the necessity of our service work. It was also a great pleasure to brainstorm, write, translate, and edit this pamphlet with the Kaisei students. Having different perspectives interacting and uniting was an essential factor in finding international-scale solutions to some of the issues that we address in the pamphlet, and what we accomplished together was infinitely greater than what one person or the students from one school could achieve.

Robert May

今夏、チョートと開成で合同開催した初めての交換プログラムは僕にとって目を見開くような体験ばかりでした。東日本大震災とその津波から7年以上経った今でも、石巻市では特にその被害の影響が激しいということに気づかされました。講義やディスカッション、つなぐ館の震災ボランティアの体験や石巻日日新聞の手書きの壁新聞のお話、旧大川小学校への訪問など、どれもとても臨場感あふれるものばかりでとても衝撃を受けました。僕が一番影響を受けたのは実際に石巻市内を観てまわった後、つなぐ館でVRを通して津波前後の石巻近辺の様子を見たことでした。それは家が瓦礫の山となったり、いつもの街並みが荒原となったりという光景で、文字通り日常が失われたと言っても足りないくらいの惨景でした。これらの体験は開成生と僕らの話し合いの必要性を再確認する上で必要不可欠だったとも言えます。ディスカッションの中で国際的な観点での合意形成を図ることはおそらくこれほど衝撃的な体験を共通していなければ出来なかったことでしょう。だからこのパンフレットの内容は決して単一の学校や一個人でできないような素晴らしいものになったと信じています。



William May

For me, this project has been a transformative experience. Going into this trip, I had only rudimentary knowledge of the 2011 East Japan earthquake and tsunami, but over the course of my six-day stay, I learned not only about the economic and social effects of the disaster, but also of the human beings behind each tragedy and each effort for rebuilding. I was inspired by how much is being done to improve the quality of life of those affected. When we travelled to Ishinomaki, I was stunned and overwhelmed by the extent of the destruction, which left its mark even seven years after the disaster. However, coming back to Tokyo, I was inspired by the effort and passion that my Kaisei counterparts continue to pour into revitalization efforts and into looking to the future. I am also thankful for the opportunity I had to learn about Japanese culture and language from my Kaisei counterparts. I would like to thank all of the Kaisei students for putting up with my inability to speak a word of Japanese, and for guiding me over the small stumbling blocks like getting train tickets or ordering food so that I could focus on absorbing the core issues and inspirations behind current disaster relief efforts. I will always cherish this trip, and I hope that Choate and Kaisei can continue to work together in the future.

William May

僕にとってこのプログラムは大きな変革をもたらすものでした。実際に日本を訪れる前は2011年の東日本大震災について初歩的な知識しか持っていなかったのですが、六日間の滞在を通して、災害のもたらす経済的、社会的被害だけでなく、人災の裏に隠された悲劇、復興への途方も無い努力のなども知ることができました。被災者の生活水準を元に戻そうとがく中で被災者自身の努力だけではなく、多くの人の尽力があったということに僕はとても感動を覚えました。実際、石巻に訪問した際には災害の破壊力とそれの爪痕が7年経った今も残っているということに驚き、圧倒されました。しかし、東京に帰ってきた時にまた、開成の学友たちが復興ということに燃えており、将来を見据えているということにまた非常に感心しました。開成生には日本語と日本文化を直接教えてもらったことを感謝せねばなりません。全ての開成生が僕がプログラムに集中できるように、乗車券を購入したり食事を注文したりするなどという細かい一挙一動まで手伝ってくれたことをありがたく思います。このプログラムで学んだことはしっかりと心に刻みつけました。Choateと開成がこれからも共に歩んでいけるよう願っています。

Ziyan Lei

First of all, I would like to thank Kuno senpai and Kaki for organizing the exchange program. This amazing experience would not have been possible without their commendable initiative and conscientious effort. During my short stay in Japan, I not only had the opportunity to enjoy the serene landscapes and country views, and the numerous kinds of delectable food Japan has to offer, not to mention the ubiquitous vending machines, but more importantly, I learned more about natural disasters and the reconstruction process than all my prior knowledge before the trip summed up, participated in some long and intense discussions on controversial topics that exposed me to a range of different perspectives, and had some great fun with my newly-met Japanese friends, despite some negligible communications difficulties due to my near non-existent Japanese proficiency. I will never be able to forget the hours well spent at the NEWSee Ishinomaki translating brochures recording the startling damage the tsunami has brought seven years ago, as well as the moments of kindness and hopes demonstrated by the Ishinomaki community, and the thirty minutes well spent on waiting for the best shaved ice in the world. To cut a long story short, I hope you enjoy reading this pamphlet as much as we enjoyed preparing it, and keep yourself safe!

Ziyan Lei

まず、久野先輩とKakiさんにこのプログラムの準備をしてくださったことにお礼を述べさせていただきます。この素晴らしい経験は彼らの関心すべき率先力と誠実な努力抜きでは実現できませんでした。私の日本での短い滞在において、もちろん風情ある風景や至る所にある自動販売機、素晴らしい食べ物など楽しんだことも多かったですが、何より今までに学んできた知識を全て凌駕するくらい自然災害や復興についての学習をすることができました。新しくできた日本人の友達は私のほぼ付け焼き刃の日本語を全く気にせず、積極的に話を振ってくれたりし、ディスカッションの中で時には意見をぶつけ合ったりすることもありました。それらを通して私は多角的な視点を知ることができたかと思います。石巻ニューゼでの津波災害に関する資料の翻訳は石巻のコミュニティから感じる溢れんばかりの優しさや希望と相まって一生忘れられない経験となりました。そういった一生懸命な努力をした石巻での活動後の東京、30分も待たされてやっと食べられたかき氷は世界で一番美味しかったです。とにかく、私たちがこのパンフレットを作るにあたって多くのことを学び、楽しんだように、この冊子を手にとってくださったあなたもこれを楽しんで読んでくれることを願っています。もちろん、災害の対策も忘れずにね。



石巻観光ガイド Ishinomaki Tour Guide

いしのまき元気市場(Ishinomaki Genki Ichiba) 石巻市中央2丁目11-11

After a hectic morning of touring around Ishinomaki city, we were treated to a delightful kaisendon (sashimi rice bowl) at a food court above the Ishinomaki Genki Ichiba. Needless to say, the kaisendon was delicious. For students who weren't able to eat raw fish, there was another choice of a Tempuradon which also seemed exquisite. After we were all finished eating, we spent the rest of the lunch time at the Ishinomaki Genki Ichiba, which sells many local products and souvenirs.



石巻市内の観光ツアーを終えた後、我々はいしのまき元気市場の二階にある食堂で昼食に海鮮丼をいただいた。やはり石巻という漁業で名高い場所だけあって、とても新鮮だった。大方の生徒は空腹もあって一瞬にして食べ切ってしまう、追加で牡蠣やラーメンを注文する者もいた。昼食後は一階の市場で残り時間を過ごした。地場野菜や海産物など地元の商品がよく揃



えられており、賑わっていた。このいしのまき元気市場は石巻市の中でも、とりわけ活気を感じられた場所の一つであった。

旧大川小学校校舎(The Okawa elementary school) 石巻市釜谷山根



After lunch, we headed to Okawa elementary school, where close to 280 students, teachers, and civilians were swept away the tsunami. As we walked around the site of the disaster, many of us couldn't help but turn speechless. More than 7 years after the horrific day, the elementary school is the only building that stands in the area. What was once a residential area filled with life, the



eerie serenity and barrenness that the place possessed was overshadowed by its past.

We were lucky enough to have a guide who could explain the events of the disaster in



detail as we circled around the school. Translation for the Choate students was done by two Kaisei students. The guide was a former teacher at a different elementary school who lost many of his teacher-friends who worked at the school.

昼食後は、旧大川小学校の現場に足を運んだ。いしのまき元気市場からバスで揺られること約40分。沿岸部から4km離れており比較的内地部で、近くには北上川が流れている。この大川小学校では震災で、合計277名もの小学生、教師、また住民が犠牲となった。かつては住宅街であったこの街並みが一瞬にして津波に呑み込まれてしまい、いまや残された建物は大川小学校のみとなってしまった。校舎の連絡通路は極度に曲がっており、波の威力を7年後の今も我々に伝え続けている。そしてこの閑散とした地には、ただ自然が生い茂るばかりとなっている。石巻に滞在した3日間のうち、最も復興の余地が残されている事を痛感させられた場所でもあった。



今回のボランティアツアーでは、ガイドさんの話は全て丁寧に後輩がChoate生に翻訳してくれた。このような難解なトピックに関してこそ正確かつ自然な英語に翻訳するには細心の注意を払う事が求めら

れ、我々にとっては今後、英語でのコミュニケーションを考える上でのとても良い練習になったと実感している。

石巻市復興まちづくり情報交流館中央館 (Ishinomaki Information Center)

石巻市中央2丁目8-11

二日目の朝、ホテルを出た我々が向かったのは石巻市復興まちづくり情報交流館の中央館だ。館内に入ると、愛らしい笑顔の英国紳士が出迎えてくれた。リチャードさんと言うこの方は石巻に住んで長いらしく、日本・海外からの観光客に2011年に起きた震災の詳細について、日本語と英語の両言語で情報提供を行っている。笑顔で親切に説明してくださるリチャードさんに親近感を感じた一方で、災害による被害の悲惨さに言葉を失った。



We went to the Ishinomaki Information Center in the 2nd morning. As we went into the building, a British man with a gentle smile on his face welcomed us. Mr. Richard, the director of this center, explained the detail information of the disaster's damage. We felt a strong affinity with his personality, and at the same time we had become speechless knowing how devastating the disaster was.

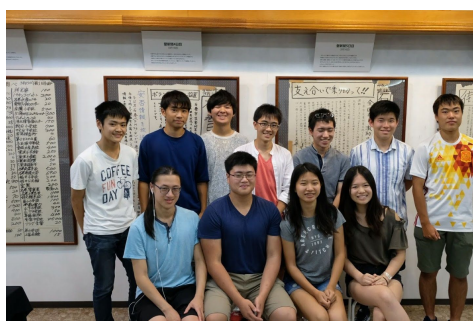
石巻ニューゼ (Ishinomaki NEWSée)

石巻市中央2丁目8-2 ホシノボックスピア 絆の駅内

石巻市復興まちづくり情報交流館中央館で震災について学んだあと、我々は石巻ニューゼと言う施設に向かった。ここでは、震災直後の6日間に渡って、石巻日日新聞社が印刷機の故障を乗り越えるために手書きで新聞を発行し続けたと言う壁新聞の展示を行っている。壁新聞について



の説明を受けた後に、我々はボランティア活動としてパンフレット類の翻訳作業に取り掛かった。昼食休憩を挟みつつ約8時間をニューゼで過ごし、壁新聞がどのようにして発行されていたかや人々が当時どのように行動していたかなどを詳細に知ることができ、また海外にも日本での出来事を伝えられるよう皆誠心誠意作業に取り組んでいた。長時間の作業を終えた皆の顔には疲れと達成感が見て取れた。



After we left Ishinomaki Information Center, we went to Ishinomaki NEWSée. This facility is constructed to preserve 6 original wall-newspapers, which were the handwrite newspapers published right after the disaster for 6 days. After we had an information session about the detail information of wall-newspaper, we started the translation tasks as a volunteering work.

During the whole 8 hours in this building, we were able to learn how the wall-newspapers were made, how people were acting after the fatal incident and so on. We were all looking exhausted after a hard work, but we all were feeling a great sense of accomplishment.

西澤 大志・柚木 一心

By Taishi Nishizawa and Isshin Yunoki

おわりに

久野 凌

私が初めて石巻を訪れたのは、震災から7年後の3月14日でした。震災前後だけのテレビの追悼報道に違和感を覚えながら、その当時小学4年生だった私の震災の記憶も遠くなっていました。本当に復興したのだろうか。テスト休み中のその日の早朝、私は石巻に向かいました。

石巻の駅を降りると009や仮面ライダーのキャラクターが私を迎え、至る所にあるキャラクターにわくわくしました。駅のそばのレンタカー店で手続きをしている間、震災の場所をみて回りたいと聞いたところ各所を教えてくださいました。そして「大川小学校は見る時間があるならぜひ行ってみたい。と用意されていたかのように住所が書かれた紙をもらいました。各所をまわると復興にはまだ遠く、大川小学校では言葉が出ませんでした。その帰りの川沿いを走る道は山の向こうに落ちる橙の楕円の夕日がとても美しく静かな流れの水面にもその色を映していました。あの日、この川を遡ってきた津波の時も絶望の時も夕日は変わらず美しかったのでしょうか。怒りにも似た悲しみがこみ上げ、車中はただ黙ってその夕日を見ていることしかできませんでした。このままではいけない、もっとたくさんの方が知るべきだ、私にできることは何かないのかと、そこから考えを巡らせてこの企画につながりました。立案からここに至るまで何度も挫折しそうになりながらも今日までこられたこと、この企画に関わって下さったすべての方、参加してくれた開成の後輩、Choate生に感謝致します。来年も続くことを願って。ありがとうございました。

Postscript

Ryo Kuno

It was seven years and three days after the disaster that I first visited Ishinomaki. Feeling uneasy of the TV showing mourning only around March 11th every year, the fear I had of the earthquake at 2011 was slowly fading away through those seven years. Did the devastated areas really make its restoration? The next day after final exams, I found myself heading to Ishinomaki in the early morning.

When I saw the Cyborg 009 and the Masked Rider characters right outside of the ticket gate, I really got excited, for they were the heroes of my youth. While waiting for the registration of a rental car, I was asking around where I should visit during the one day stay. The man at the rental car station gave me an address written on paper, as if he was waiting my question. Visiting around the damaged areas and especially Ookawa Elementary School, or something that was Ookawa Elementary School, I couldn't even say a word. The only thing I remembered was the amber red sun sinking to the hill, making a beautiful reflection on the quiet riverside. Was the sun also as beautiful as this on the day the tsunami struck from the river? Silent sadness similar to anger filled my heart as I kept chasing the still red sun with my eyes. This has to change. More people should know about 3.11. Desperately thinking, I finally came up with this idea of the program. There were a lot of times where I nearly broke down, but somehow we made it to this point of you taking this booklet to your hand, reading it. I would like to thank everyone involved in this program including my dear Kaisei students and Choate students. I hope this project lives on. Thank you very much.

謝辞

本企画を進めるに当たり、一般社団法人 石巻圏観光推進機構の飯島 千恵さんなしには成り立ちませんでした。心より感謝を申し上げます。また快く寄稿下さった復興支援ボランティア・大川小学校研究会世話人の金海初芽さんに深く感謝いたします。私たちの石巻での活動において協力して下さいました皆様に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

Acknowledgments

In bringing this program to fruition, we couldn't have done this without the help of Ms. Chie Iijima from the Ishinomaki Area Tourism Information Center. I would like to show my gratitude here. I would also like to thank Ms. Hatsume Kanaumi, an Ookawa Elementary School Study Group Agent/Restoration Support Volunteer, who willingly contributed her articles to this pamphlet. Also, thank you very much for all the people who helped us at Ishinomaki in our volunteer work. Our program wasn't possible if it weren't for your help. Again, thank you very much.

冊子印刷代ご支援について

この冊子の印刷代はクラウドファンディングReadyfor「国際的に被災地石巻を発信！日米高校生が再考する東日本大震災」(<https://readyfor.jp/projects/18193>)にて支援金を募りました。そして多くの方々のご支援により印刷発行することが出来ました。

藤田 長子 様
高橋 知子 様
田中 寧 様 (S48年卒青組)
青木 様 (S58年卒黄組／H24年卒白組／H26年卒紫組)
佐々木 剛 様
Scott David Thomson 様
熊谷 様
高宮 信乃 様
原 淳一 様 (H11年卒黒組)

上記の方々含め、36名の皆さまにご支援していただきました。我々高校生の活動に温かいご支援と応援を下されたことを心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

This pamphlet's printing cost was raised through a crowdfunding project on the following webpage: "Readyfor— Choate Kaisei Exchange Program." (<https://readyfor.jp/projects/18193>) We've received support from 36 people, and we were able to complete this project because of their warm support. Thank you so much for helping and supporting us high school students with kindness.

冊子発行の目的

石巻は素晴らしい場所です。海が美しく、食べ物がおいしく、そして人はとても優しい。若い世代がたくさん訪れるべきだと深く感じました。例えば田代島（通称猫島）を訪れる外国人にも、猫を見てただ楽しんで帰るだけでなく、もっと東日本大震災のことを知ってもらうべきだと強く感じました。

この冊子は石巻を訪れる外国人観光客の方々や、小中高生の皆さん、地域の方々にも手に取っていただきたい、震災について再度一緒に考えていただきたいという目的から発行致しました。どんなに英語が出来ても、アイデンティティや文化の違いを理解し合わないとは真に通じ合うことはできないと今回私たちは学びました。

しかし、英語ができることよりもっと重要なことは、お互いを思いやる気持ちだとも思います。おもてなしの心が深切な日本人。片言の単語でも、困っている外国人がいれば、積極的に声をかけるべきだと思います。災害時にそれがあれば、きっともっと素晴らしい国になるに違いない。私たちはそう思います。

私たちは微力ですが、この活動を続け、微力の積み重ねがやがて水面に広がる波紋のように少しずつでも大きくなって、地域社会のお役に立てればと願っています。ご協力、ご支援下さった皆さま、この冊子を手にとってくださいあなたに心より感謝致します。ありがとうございました。

Choate Kaisei Exchange Program メンバー一同

Ishinomaki is a wonderful place. The ocean is beautiful, the food is delicious, and the people are kind. We thought that more younger students should visit there. For example, visitors who may visited for Tashiro-shima (the island of cats,) should also definitely stop by the city of Ishinomaki, not only to enjoy, but also to know about the 2011 Great East Japan Earthquake.

The purpose of this pamphlet was to have foreign visitors, domestic students, and the people of the areas to once again think about the disaster with us. We learned that a strong command of English wouldn't be enough for understanding differences between identities and cultures. It was the feeling of compassion and understanding pain, that we needed.

The spirit of *omotenashi* is what we Japanese cherish. We believe that we should lend a helping hand to that man who's lost in Shibuya station, or that woman who's struggling to understand restaurant guides. If we were able to take these actions in disaster situations, we believe that Japan, a country that lives with disasters itself, would become a more beautiful, heart-warming nation as a whole.

We may not be so influential and powerful. But we hope that the repetition of these small actions would become like a ripple in silent water that slowly grows. Thank you so much for taking this pamphlet in your hands. Thank you so much for everything.

Choate-Kaisei Exchange Program Members

開成高校／Kaisei High School

久野 凌／Ryo Kuno
西澤 大志／Taishi Nishizawa
代永 雄也／Yuya Yonaga
佐藤 遼／Ryo Sato
柚木 一心／Isshin Yunoki
熊谷 勇輝／Yuki Kumagae
白石 航太郎／Kotaro Shiraishi

チョート・ローズマリー・ホール／Choate Rosemary Hall

Kaki Su
William May
Robert May
Ziyan Lei

Ishinomaki Choate-Kaisei Exchange Program**Aug,17th~ Aug,23rd2018**

責任者：久野 凌／Ryo Kuno 開成高校／Kaisei High School
デザイン（表表紙・裏表紙）Design of the Covers：Naomi Koo／Choate
Rosemary Hall

石卷

